

大物船矢倉 義經千本櫻
吉野花矢倉

序詞忠なるかな忠。信なるかな信。勾踐の本意を達す陶朱公。功成り名遂げて身退く。五湖の一葉の浪枕。西施の美女を伴ひし。例を爰に唐倭。四海漸く穩かに壽永き年號も。短く立つて元曆と詔も。革り。戸ざさぬ垣根卯の花も。皆白旗と時めきて。オロズ武威はますく。盛んなり。寶祚八十一代の天子安德帝。八島の波に沈み給へば。後白河の法皇政を執行はせ給ふ。昵近の公卿は左大臣の左大將藤原の朝方。君の御覺えよきまゝに己に語ふ者には。官位昇進申下し。依估量頂の沙汰大方ならず。群臣これを如何ともいはじ敷慮に背かんとフッおのく。舌を巻筆や。大内記御日次に硯

取添へ座列する。瀧口に案内して源氏の大将。源九郎判官義經院參のその粧ひ。五位の雜袍善盡し派手をつくせし太刀飾り。供の飾りは三國一西塔の武藏坊辨慶。大紋の袖立烏帽子僧衣を憚る扮裝は。アシ實にも由々しく見えにける。大内記取次に源氏の武士參上と。申上ぐれば左大將いかに義經。此度八島の合戦の様子。法皇委しく聞召さず。天皇の入水一門の最期。御日次に記されん申上げよとある。義經はつと承り。さん候今度の戦。平家は千騎ばかりと見え。八島の磯に陣を張る。義經が勢は四百餘騎。只事にては勝つことなしと。不時に寄せたる鬨聲に。周章狼狽き平家の勢船に取乗り沖中

へ。天皇をフシ具し奉る。コハリその時城に火を放ち。明りに眼覺せしやらん。能登守教經小船に乘移り。稱代の弓力引詰め差詰め。射たる矢先は義經が。馬の先に立塞がる佐藤繼信腹に受け。馬より下にどうど落つる。その首取らんと菊丸。船より磯邊に上るところ。弟佐藤忠信が射返す矢先に敵味方。互に不便の武士を討たせし供養と相引に。その日の軍はフシさつと退く。ハッシ明くれば敵より出す扇。與市宗高射て落す。ギン箕尾谷景清鐵引。敵が感ずる味方が響むるされど。源氏は勝軍。平家は軍兵討ちなされ能登守教經。安盛の太郎。同じく次郎。二人を左右に引扱み海へかつばと飛入つたり。これを冥途の門脇教盛。同じく經盛。資盛有盛。行盛など我もくと續いて入る。新中納言知盛は。御所の御船の御供と進んで海にざんぶと入る。

天皇の御事はやはかと存ぜし油断の間に。二位の尼上御供し。四海へ入りしと聞いたるばかり御骸をも求め得ず。女院ばかり助かり給ふ。生捕つたる聖は先達で一紙に認め。觀覽に供へ奉れば。申上ぐるに及ばずと事こまやかに述べらる。その辯舌を其儘に、フシ日次に。記しとめける。朝方苦つたる氣色にて。それ程の功ある義經。頼朝に對面叶はず腰越より追返された。その科をいへ聞かんと。聞くより辨慶進み出で。我が君の御爲には御兄なれども。蒲冠者範頼卿緩いお生れ。手柄が無さに義經公にしなすを付け。彼方の手柄にせうために。附従ふ仮人ばらが讒言と。氣のつかぬは鎌倉殿の無詮議といはれども果てず。ヤアだまれ辨慶。假令讒者の業にもせよ。一旦の兄の命申開かず。腰越よりすごくと歸りしは。弟の義經さへあの通

りと世上の見懸し。理非辨へぬ兪忽の難言。尾籠至極と誠の詞。阿ホ、ウ神妙なり義經。軍の次第を奏聞して。御前宜しく計はんと。表面はぬつべり取持顔。寐鳥さ々と底巧大内記引連れて。御殿間深に入りける。小菴の陰より左大將朝方の諸太夫。主に劣らぬ人苗字も猪熊大之進。コレ義經殿御油断く。治つたとはいひながら平家の殘黨。小松の三位維盛の簾中若葉の内侍。その儘に置かずとも何故片付けて了はれぬ。ホ、ウ何事と存ぜしに。女童の事よな。何萬人あるととも天下の妨にならぬこと。そのまゝで事は濟む。ムウこと濟むとは。どうなりと成り次第ならこつちも勝手。身が主人朝方公。若葉の内侍に御執心と。皆までいはせず武藏坊。ヤアならぬく。鎌倉殿のお指圖で縁組は兪も角も。平家方の女房を私に引入る

るは味方も同然。ならぬことといひほぐせば。ヤアしやらくさいおけく。左いふ義經。平大納言時忠の掣ならすや。はいでもそれで知れた。若葉の内侍もちえくつたな。ヤアちえくつたとは我が君を。雀の様にぬかしたりな。コリヤ此方が鳥ならおのれは蠅。うぬかさすつこめと。ひつ掴んでちいと抛る音はどつさり。アイタ、ヤレ荒立つるな武藏坊。しされくと制する折から。御座の間の御簾捲上げ左大將朝方。怪しの箱引抱へくわんたるその風情。ヤアく義經敬つて承れ。桓武天皇雨乞の時より。禁廷にとゞめ置く初音と名づけたる鼓。義經豫て望む由聞召し及ばれ。此度の御恩賞に院宣に添へ賜るぞ。拜見せよと差出す。義經はつと頭を下げ。脚敷ならぬ身に及びなき願ひ。雨乞に用ゆる鼓軍の爲にと存

する所。有難しくと箱押戴きく。

相添へられし院宣とは如何なる勅命。いで拜見と箱の蓋開けば内には鼓ばかり。

以ハ、ウ院宣とて外になし。其鼓が則ち院宣。惣じて二つある物を陰陽に取り。兄弟に像る。鼓の裏皮表皮。同じ育ちの乳ぶくらにかけ合はされしはこれ兄弟。裏は義經。表は頼朝。准へて其鼓を打てとあるが、院宣なりと聞きもあへず。阿ハア

ア其鼓が院宣ならば頼朝義經打和らき。陸じく禁廷の守護致せとの勅候ふや。イヤさうでない。君に忠勤を抽づる

義經を。科ありと追返せし頼朝は。法皇へ敵對ふ所存。兄頼朝を打てとある追討の院宣と。義理を押狂げて兄弟中。同志討

させて了はんたくみ。義經はつと當惑しフシ差うつむいて居給ひしが。阿コハ日頃異なる法皇の勅命。假令敷慮に背くとも兄を討つ事存じも寄らず。頼朝に科あら

は。義經も御刑罰に罪せらるゝが弟の道。

所詮此初音の鼓申請けねば院宣も承らずと差戻せば。朝方いよゝしたり顔。

阿論言は汗の如し。勅命を背けば義經朝敵なるが合點かと。無理と非道にいひ枉ぐる巧と知つても勅命と。いふに返答恐れあり。フシ只ハツくとばかりなり。

堪り兼ねて武藏坊すつと出で。阿コレサ左大將殿とやら。王様は天下の鑑。無理はしやれば天下中が。皆無理いふが合點か。無理があるなら傍に居る公家の

役で何故鎮めぬ。大敵にも怯まぬ大將よう一言でやりこめたなア。官負けさせて

は此腹の虫が堪忍せぬ。アサア出直して謝罪りやと腹立つ儘の傍若無人。義經はつたと院ませ給ひ。阿やをれ辨慶。高位高官に對しての悪口。最前より無禮の段々言語道斷其所立ちされ。我が目通りは叶はずと。以ての外の御機嫌に。詮方も

なく立端なく。フシカ、リ誤り猪熊よゝ氣

味とほくそづくを目もかけず。朝方に打向ひ。阿日頃の懸望却つて仇となる鼓。

申請けねば君に背く。申受くれば兄に敵對。二つの命を背かぬ了簡。打てとある院宣の鼓。たとへば頼朝申しても打ちさへせねば義經が。身の誤にもならぬ鼓。頼朝

頼朝申奉ると鼓を取つて退出す。御手の中に朝方が悪事を調のしめくり實にも名高き大將と。末世に仰ぐ篤實の。強く優なる其姿。一度に開く千本櫻榮え。久し

き三異君が代や。阿蘭省の花の時鐘頼朝の内にかしづかれし。小松の三位維盛の御

臺若葉の内侍。若君六代御前平家都を落ちしより。今は麻山の隙れ里。北嵯峨の草庵に。メ親子諸共身を忍び。仕馴れぬ業も佛の行と。小オクリ谷の流れを水桶に主の尼と委荷ひ。フシ庵の内に立歸り。阿コレ申し御機嫌。わしが一日たが

するを笑止がつて。荷の片端お手傳ひなされ。それ／＼お肩が痛さうな。下々のする業は夢に見もなされまい。時世とておいとしげや。アレ何聞いてやら六代様の莞爾と笑うてちや能うお留守なされたなうと。ほた／＼いうてあしらへば。御臺所も打萎れ。調知りやる通り夫の維盛様。御一門と諸共。安徳天皇を供奉し。都を開き給ひしより。此庵に親子諸共。永々の世話になるも。そなたが昔お館に奉公しやつた少しの所縁。維盛様も西海の軍に海へ沈みお果なされたとも。又生きてござるとも様々の噂なれども。都をお立ちなされた日を。御命日と思うて居る。殊に今日は男君重盛様の御命日なれば。心ばかりの香花取つて。閻伽の水も供へん爲。手づから水を汲みました。取分け此月はお新月。昔の形で回向せば。地せて佛へ追善と。狭布の細布身せば

なるオウラさもしき。小袖ぬぎ捨てて卯の花色の二つ襷。うきに囊身の數々は。十二單の薄紅梅思ひの。冷栗色や緋の袴。いでそよ元は大内に。ハラス官仕へせし。ナホスフシはれの衣。引繕ひ。繪すつたる手箱より重盛公の。繪像を取出しさら／＼と。ホラス佛間にかけて手を合せ。小松の内府淨蓮大居士。佛果。フシ菩提と回向して。コレ六代。そなたの爲には祖父君。稚けれども平家の嫡流。よう手を合して拜みやいの。取分けて此繪像。親子御とて維盛様に生きうつし。ほんに扱重盛様が今迄生きてござらうなら。地平家はよもや亡びはせじ。孫子の爲にもよからうに彼方がござらぬばつかりで。此要目を見るわいのと。繪像に向ひ在すが如く。くどき立て／＼かつばと伏して。エエ泣き給ふ。折節表へ来る足音。ちやつと心得主の尼。枕屏風を引廻し。ッお姿隠す間もなく。扉引明けずつと入り。コレ／＼庄屋殿へ判持てごんせ。ハアアそれは合點がいかね。今迄は一年に一度。宗旨の改より外に判のいらぬ獨尼。殊に此方も月別取りに来る歩行殿とは違うた。マア何事ぢや聞かさつしやれ。イヤされば。爰らの事ではありそもないが。此嵯峨の庵室に珠數の實で過ぎるは付けたり。表向には佛を見せかけ。内證へ取り入ると。小眉目の美しい髪長を出しかけて。御所出尼出圍者。大海小海と名をつけ。一屏風を何ぼ宛と。佛前の線香を立て。暗商ひをするといの。是といふも。祇王祇女。佛などといふ白拍子のしやの果が。尼になつて此嵯峨に居る故に。それど所がみだらになつたとて。人別の判形。此庵にも其様な。じだらくはござらぬかや。ヲ、あのいはしやる事わいの。佛様は見通し。そんなじだらくな事何で

せう。聞くも汚れる住んで下され。ハテ往にます。地早う印判おこさつしやれと。フシ家内を見廻し立歸る。地お氣が詰まる。と主の尼杖屏風を押しつけて。今のお聞きなされたか。地覺えもない事いうて來て。そしてマア氣味の悪い。家内をひつた見廻して。ヲ、是はしたり。今の奴めにお前のお草履ちよろり一足せしめられた。エ、小盗人であつたもの。氣がつかいで取られたと。地いへば御臺も深くみ。世を忍ぶ身の上は何角につけて案じが絶えぬ。扱もく情なき。親子の身ではあるぞいとの内は。エエ歎きに疊れども。地外は春めく物賣聲。地膏笠加賀笠。地ゆすく一荷打擔げ笠をお召しなされぬかと。フシ門口より差現げば。地ヲ、とでもない。尼の内に膏笠が何でいろ。地胡散な和郎ちやと呵られて。地イヤお氣づかひな者でなし。地私でござると笠取つて

入るを見れば小金吾武里。御臺所は飛立つ計り。此間は便も聞かずどうかかうかと案ぜしに。サアくフシ爰へとありければ。地小金吾も手をさげて。地先づは御臺所にも御健勝。ホ、ウ若君も御機嫌よき御容顏を拜し。拙者も大悅仕る。いか様にも今日は。先君重盛公の御祥月御命日なれば。御裝束を改め御回向をなされしよなど。地佛間に向ひ手を合せ。此君お一人ましまさぬ故御一門はいふに及ばず。我々迄も憂艱苦とエ暫し。涙にくれるが。地拙者めも御買の爲。思ひついたる笠商賣。前髮立の此小金吾。何が仕付けぬ商賣なれば。御推重下さるべし。扱先づ申上げたきは。主君維盛卿の御身の上。未だ御存命にて高野山に御入りと。儲なる都の噂。何とぞ拙者も。若君のお供をして高野に登り。御親子の御對面。一つには小金吾も。再び主君の御顔を拜し申度き願ひ。それ故旅の用意を致し只今参り候と。地聞くより御臺も夢見しごとく。なに我が夫の高野とやらんに生存へてござるとや。それは嬉しや有難や六代ばかりと言はずとも。女子の上らぬ山ならば。麓まで。自も同道せよや武里とフシ悦び涙にくれ給へば。地ヲ、お嬉しいはお道理く。わしもお供したけれど。足手まといな年寄尼。それならば日のたけぬ内一時も早いのが。ヲ、成程寸善尺魔のなき中に。御親子共に御用意早う。地笠は私が手の物早速ながら御用に立てんと。俱に用意のフシ折こそあれ。地表の方に人音足音。尼は心得いつもの通り佛壇の下戸棚へ。御臺親子御押し入れつきやる其間もなく。朝方の諸大夫猪熊大之進。家來引具し柴の戸踏みのけどやぐと亂れ入り。地此庵室に維盛の御臺若菜の内侍。悴六代諸共にかくまひ置く由。

注進によつて召取りに向うたり。何處に隠せし有様に白狀せよと、星をさゝれて主の尼。はつと思へど素知らぬ顔。これは又御雜題維盛の御臺とは所縁かゝりの無ければ。かくまふ筈もなしと。ぬいふに傍から小金吾武里。それは定めて庵室遠ひ。外を御詮議遊ばせと聞きもあへず。ヤア前髪めが小差出た指圖。先づうぬは何奴。イヤ私背笠賣。ヤア商人ならばとつとと歸れと。家來に持たせし絹緒の草履取出し。コリヤ野はすまい爲に家來を所の歩行にして入込ませ。證據の爲に取つたる草履。年寄尼めが赤たれた服物穿きはせまい。サア是でもあらがふか。奥へ連行き責めさいなみ白狀させんと。主の尼が小尉取つてぐつと捻上げソレ家來ども。拷問せよとあらけなく引立て。フシ一間の中へ入りにける。

小金吾は氣も氣ならず何とせん彼とせ

んと。奥口窺ひ隙間を見て。御臺親子を出し參らせ幸ひの背笠荷と。細引かなぐり蓋押明け。荷底に二人を入れ參らせ。旅の用意の風呂敷包。重盛公の繪像迄。取つては押込みさらへ込み。あたふたしつらふ其中に。尼を一間に縛り上げ立出づる大之進。察する所風を食うてふけらしたもので有る。背笠屋め存ぜぬか。ア、いか様。それならば此庵の裏傳ひを。氣高い女が子を連れて。逃げたのはたつた今と。聞くより猪熊目を光らし。ヲヲそれに極つた。高が女の足なればぼつかけて搦め取らん。家來二人はこれに残り奥の尼めを取逃すなど。フシ跡を暮うて追掛け行く。そしてやつたりと小金吾はヘルン心も空に荷を打たたげ。行かんとするを二人の家來。兩方より小金吾が棒端取つてどつかと引据を動かさねば。コリヤどうなさる。ヤアどうするとは胡

亂者、此荷底に挟まれたは女の着物。イヤこれは謎へ笠のいたゞき。ヤアぬけくと吐すまい。御臺親子に極つた。ぶち明けて詮議せんと。立ちかゝる兩人が。肩背つかんで引退くる。詮議させぬは曲者とすらりと抜いて切りかくる。引つばづし引つばづし枴を振上げ。手へ叩き伏せ。急所々々を力に任せ。叩きのめせば二人の家來。目鼻より血を出しフシのた打ち廻つて死してげり。歸らぬ其中にと。荷を打擔げ聲張上げ。背笠加賀笠。かさ編笠。網を遁れて。三果出でて行く。舞花の姿も引きかへて。主従七騎。駒のはな。再び御運開かれし。かの頼義の。奥州攻。君は八島の勝軍。國も静か。舞扇。はいやくどつと響むる聲。閑聲とは打ちかはり賑ふ御所は二條堀川。九郎義經の奥方勇めの御催し。中座の御殿

は卿の君新殿は九郎義經。一方女中が取る。かたへに並ぶは駿河の次郎。次は坊ある龜井の六郎。陪臣外様に至る迄舞の様子には知らねども。やつちや名人お上手と。静養めるも君養める。フッ色めきてこそ見えにけれ。御殿から御殿への女中の使此方より。龜井が使者の御口上五にめでたい面白い。お氣はつきぬか好い慰みと。御夫婦中でも禮儀式事終れば樂屋より。ヘルン装束改め。静御前。廣庇に立出で。駿河龜井に會釋して。御臺所の御前に向ひ。御望とある故。拙き舞ひぶり御目に向け。おはもじさよと。フッ述べければ。御イヤナウ始めて見ましたが面白い事。此間より醫の助けを請けても。心悪しく暮せしに。我が君様のお勧めで今日は思はぬ好い慰み。そもじには御大儀と仰せにはつと辭儀に餘り。御機嫌に甘え申上げたいお願ひ有り。

取上げ下されうかと。フッ物々しげに言上ぐる。御ナウ其お尋ねに及ばぬ事願ひとは餘所々々しい。近う寄つて物語りと仰せに猶も恐入り。御願ひと申すは外でもなし。氣の毒は武藏坊辨慶殿。何か大きな仕損ひしたとて。樂屋へ来て大づけない。ほろ／＼泣いて私を頼み。つき話つた氣の細いお人さうで餘りと申せばいぢらし。何とぞお詞添へられ。我が君様の御機嫌も直る様。此事ひたすらお願ひと。申上ぐれば御臺をかくしく君にも笑ひ。駿河の次郎佛頂顔。いやはやかゝつた事ではない。六郎お聞きやつたか。武藏坊辨慶ともいはるゝ者が。女中を頼んでお詫言樂屋へ往て泣くといの。ホウちつとさうである。彼めと馬の合うた伊勢片岡。熊井鷲尾軍治まつてより休息のお暇で國々へ歸る。頼みに思ふ佐藤忠信は。母の病氣とあつて出羽の國へ

往ぬる。貴殿と某は相手にならず。どこ打つて舞はうで舞ひから取入つて詫言。まそつと慰らうといつその事。坊主天窓を奴にせうと。見うて見たらば猶よかろと。フッ内証評議も猶をかくしく。御臺は笑ひの内よりも如何なる仕損じせし事ぞ。笑止をかしい執成と仰あれば義經公。過ぎつる参内の折から禁廷にての我儘。左大臣朝方公への悪口。御家來を踏打擲。其場で急度呵付け。我が目通りへ叶はぬと申付けたがそれ故ならん。手綱赦すと人喰馬。公家でも武家でもたまらさぬ。持てあぐんだ鯨坊主め。まそつと懲せと御上意に。駿河の次郎團に乗つて。あつたあつた七ツ道具が大きな邪魔。源氏には坊主の大功があるとお家の名折。此儀も急度止める様。仰付けられ然るべしと。申上ぐれば龜井の六郎。御イヤまだ七ツ道具は御普請の役にも立つが。難儀な物

は彼の大長刀。柄も四尺。刃も四尺。八尺の物を振廻すによつて。傍邊の鼻がたまらぬ。太平の代には役に立たぬ人間。

鬼角分押込めて置くがよからと、評議區々。御臺は笑止とヤレ其様に説るを聞いたら又怒る。共々お詫と執成あれば義經公。天性懲もなき坊主め。急度意見し重ねて荒氣を出さぬ様。共にと座を立ち給ひ。駿河龜井と引連れて、ソシ一間へ。こそは入り給ふ。靜は嬉しくサア急いで武藏殿を呼びましてと女中を走らせ。御前のお詞添うた故。有難う存じますと、ソシ挨拶すれば。御イヤそまじのお願ひ故と、互の辭儀も戀の義理。憎氣嫉妬の角もなく丸い天窓の武藏坊。腰元婢に引立てられこはい。くで七尺の體も三尺八九寸。四尺に餘る大太刀を。引ずらしてぞ這出づる。腰元ども口々に。さりとては片意地な坊様。アレ御

覺じませ。跡退りばかり致されますと。告口いへば是さく。其様に悪くいぬもの。弱身へ付込んで惨い和郎達。人には報があるぞよと見廻す目玉に。アレ又睨まれます。コレサ細目だ。く

と目顔しかめて。ソシ身を縮む。靜は手を取り御前へ連出で。モウ堪忍しておやりなされて下さりませと。半分笑ひの執成に。卿の君はしとやかに。君は船なり臣は水。浪立つ時はおのづから。君のお船を覆へす。家來の業とて言譯ないぞ。重ねて急度荒氣をやめ。おとなしうなつたらよからと、子供意見に辨慶は。たじアイ。くと、揉手して、ソシ誤り入りし風情なり。然る所へ遠見の役人。篠原藤内あわたしく罷出で。今日大津坂本の邊を巡見致せしに。忍びくに鎌倉武士都へ入込み候中にも。土佐坊正尊海野の太郎行永。熊野詣と偽り我が君

の討手に向ふと専らの風聞。殊に只今鎌倉の大老川越太郎重頼。我が君へ直談とてお次に控へ罷在り。如何計らひ申さんやと尋ね申せば卿の君。心付ぬ事どもや。其川越太郎は、自とは故ある人。土佐坊海野が討手の様子。知らさん爲に來りしか。何にもせよ縁あれば苦しうなし通し申せ。其旨君へも申上げん。武藏もお目見えと。ソシ座を立ち給へば武藏坊。討手とはうまし。我等が世盛忝い。土佐坊でも海野でも。たつた一吞一擲。首引抜いて參らんと。駈出すを靜は押とめ。ソシそれがもう悪い。お上の御意も待たずおとましの坊様やと。

無理に引立て御臺と共に。義經公のおはします。オカリ奥のへ殿へぞ急ぎ行く。程なく入來る武士は。鎌倉評定の役人川越太郎重頼。大紋烏帽子爽に。年も五十路の分別盛り。ソシ廣庇に入來れば。

御主九郎判官。御裝束を改められ。しづ
 く立出で給ひ。御ヤア珍しや重頼。兄
 頼朝にも御變りなく。百侯百司も無恙な
 しやと仰にはつと頭をさげ。御先づは御
 健勝を拜し恐悦至極。右大將にも安全に
 渡らせられ。諸大名も毎日の出勤。賢慮
 安んじ下さるべしと申上ぐれば義經公。御
 シテ其方は海野土佐坊同役にて上りつら
 ん。但しは外に無用事ありやと尋ねに重頼
 さればの儀。御君に御不審三ヶ條。一々お
 尋ね申上げ。御返答によつて海野土佐坊
 と同役。恐れながら過言は御赦免なされ。
 訊ぬる仔細御返答と申上ぐれば亦面白
 し。此義經に不審あらば。兄頼朝に成り代
 り過言は赦す。訊ねて見よ申開かん遠慮
 無用と。御仰に猶も平伏し。御冥加に餘る
 仕合せ。とても事に御座改め下されよ
 と。地席を立てば大將も末座へさがつて
 川越を。フッ上座へこそは請ぜらる。地
 席改つて川越太郎いかに義經。平家の
 大敵を亡ぼし軍功を立てながら。腰越よ
 り追つかへされ無念にあらん。但しさも
 なかりしか。はつと義經袖かき合せ。
 親兄の禮を重んずれば無念なとも存ぜ
 す。ヤア其詞虚言々々。親兄の禮を重ん
 ずる者が平家の首の内新中納言知盛。三
 位中將惟盛。能登守教經。此三人の首は
 賢物。何故偽つて渡したぞ。先づ此通り
 の御立腹。サア御返答はと訊ぬれば。ホ
 ヲ。其言諱いと安し。賢首を以て眞
 とし。實を以て賢とするは軍慮の奥義。
 平家は二十四年の榮華。亡び失せても舊
 臣陪臣國々へ分散し。赤旗の翻翻する時
 を待つ。一門の中にも三位中將惟盛は。
 小松の嫡子で平家の嫡流。殊に親重盛
 仁を以て人をなづけ。厚恩の者其數知ら
 ず。維盛存へ有りと知らば殘黨再び取立
 つるに治定。又新中納言知盛。能登守教
 經は古今獨歩のえせ者。大將の器量あり
 と招きに従ひ馳集る者多からん。さす
 れば天下醜ならず。何れも入水討死と世
 上の風聞幸ひに。一門残らず討取りしと。
 賢首を以て欺きは。一旦天下を靜
 させん義經が計略。と有つて捨置かれぬ
 大敵故。熊井鷲尾伊勢片岡。究竟の輩を
 休息と偽り國々へ分け遣し。思ひびく
 に討取る手筈。かく都に安座すれども。心
 は今に戦場の苦しみ。兄頼朝は鎌倉山
 の星月夜と。諸大名に傳かれ。月雪花の
 散び。同じ清和の胤ながら。晨には禁
 廷に膝を屈し。夕には御代長久の基を謀
 る。何時か枕を安んぜん。淺まし身の身
 上と。打怕れ。給ふにぞ。實に理
 と重頼も。思ひながらも役目の切羽。
 ムウ扱は其速懷ある故御謀叛思し立たれ
 しかと。いはいせも立てず嚇とせき上げ。
 御ヤア穢らはし。謀叛とは何を以て何を

日當と。御氣色變れどちつとも恐れず。
御鎌倉を亡さんと院宣を乞ひ給ひしに。初音の鼓を以て裏皮は義經。表皮は頼朝打てといふ聲あるとて頂戴ありしとは。左大臣朝方公より念の知らせと。聞いて義經。御扱は朝方が讒言せしな。其鼓の事は豫ての懸望。下し置かるゝ場になつて叛逆によせたる詞の品。是朝方の計ひとは思へども。院中より下さるゝ恩物。請納めずば命に背く。受けては兄頼朝へ孝心立たすと。望みに望みし一挺なれども。打てば鼓に聲ありとアレあの如く。床に飾りて眺むるばかり。佛陀も照覽あれ。打ちもせず手にも觸れずと仰に川越へ、はつと三拜し。其御誓言の上何疑ひ奉らん。二つの仰分けられさつぱり明白さりながら。情なきは今一つ。御簾中卿の君は平大納言時忠の娘。平家に御縁組まれし心はいかに。

ヤア愚かな尋ね。兄頼朝の御臺政子は北條が娘。時政氏は平家にあらすや。イヤそれは主君頼朝。伊豆の伊東に御座ある時。北條一家を味方につけん計略の御縁組。ヤアいふなくも。卿の君は汝が娘。平大納言へ貰はれ育てたは時忠。肉身血を分けた親は其方。なぜそれ程の事鎌倉にて言譯せざるや。但し義經と縁あると思はれては。身の瓊瑤と思ひ隠し包んだか。卑怯至極と仰を聞くより川越太郎。居たる所をどつかと居直り。アお情ない義經公。清和天皇の末流。九郎義經を聲に持つたは恐らく日本の勇頭。五十に餘る川越が。名を惜んで祿を食らうや。今肉縁をあかせば。此方の言譯するも暗く。縁者の證據となる故に。ヲ鎌倉では隠した包んだ。陰になり日向になり。言ひくろむれども御前には讒者の舌は強くなり。智者といはれし秩父さ

へ力に及ばぬ平家と縁組。今になつて川越が娘というて得心あらうか。卑怯至極と忍召す御心根も面目なし。皺腹一つが御土産と。差添手早に拔放す。ナウは待つてと卿の君駈出でて手に縋り。其言譯は自と刃物もぎ取り我が咽へ。ぐつと突立てどうと伏す。是はと驚く義經公静も駈出で抱起し。薬よ。水よと狼狽へてフシ涙より外詞なし。川越は見向もせず。出かされた時忠の娘。さうなうては御兄弟。御和睦の願ひも叶はず。とくに呼出し我が手にかけんと思ひしが。我と最期を遂げさせて死後に貞女といはせたく。回わざと自滅と見せかけし。よう拔身を奪取つた。あつばれ健氣な女中やと。餘所に響むるも。フシ心は涙。義經間近く立寄り給ひ。回かくあらんと思ひし故。わざと川越が血筋を顯はし。平家の縁を除かんと。思ひし甲斐もなき最期。淺まし

の身の果よしなき契をかはせしと。御目に餘る涙の色御前も諸共に。彼方此方を思ひやり。スエテ泣きしづみ給ふにぞ。

手負は君を戀しげに。打眺め。フシ打眺め。一つならず二つまで大切な言譯立ち。残る一つは平家と縁組。其科わたしが皆なす業。戀慕ふ身をお見捨なう。是迄は甚いお情。世につれないとはかぬいは。明日を定めぬ人の命。短うお別れ申します。靜殿。我が君様を大切に。頼むぞやいのとせき上げてわつとばかりに。泣きけるが。調サア川越殿。平大納言時忠が娘の首。頼朝様へお目にかへ。御兄弟の御和睦。それが冥途へよい土産と。地首さしのばす心根を。思ひやる程川越太郎。胸に満ちくる涙をば呑みこみ。傍に立寄り。似合はざる喉なれども。調玄宗の後楊貴妃は馬鬼が原にて。歌舒翰に討たれ。天下の頬ひを拂ふ。御兄弟

確執とならば萬民の歎き。清き最期も天下の爲。出かされた過々。あかの他人の某が。地介錯して進ぜうと。刀するりと抜放す。調ナウ其あかの他人の。お手をかるも深き御縁。とてもものことに。たつた一言。親子の名乗は未來でせう。さらば。さらば。地くくと討つ首よりも骸は先へ川越が。どうど坐してぞしをれ居る心ぞ。ス思ひやられたり。靜御前も義經も歎に沈み給ふ折から。耳を突抜く鐘太鼓。フシ鬨をどつとぞ上げにける。地コハ如何にと靜は仰天君も驚き。扱は海野土佐坊めが攻めかけしと覺えたり。龜井駿河と仰せの内より押取刀

で兩人が。表をさして駈出づるを。調ヤレ待たれよと太郎は呼留め。仰分を聞く迄はと留置きしを攻めかけたは。彼等も讒者と一味の輩。地とはいへ兩人鎌倉殿の名代。過あつては敵對するも同然。只

速かに追返すか。威の遺矢で防がれよ。さないと忽ち義經の仇と。いひ含むれば兩人は。尤も道理と呑込んで。フシ表をさしてかけり行く。義經公を川越が詞至極と猶も氣を付け。無分別の辨慶が心許なし。武藏々々と地呼び給へば腰元立

出で。武藏殿は最前より打情れ居られしが。鯨波を聞くと早。悦び勇んで行かれしと。地聞くより此叙事仕出さん。靜參つて急ぎ制せよ。矢先危しソレ鐘。はつと腰元持出づる。フシ其間に長押の長刀かい込み。表へ走る女武者。堀川夜討に靜が働き。フシ末世にいふも是ならん。地如何と案じ給ふ所へ龜井駿河駈戻り。調ノ、我々味方を制しての矢を射させ。追歸さんと存ぜし所。武藏坊の無法者。玄翁掛矢を以て敵をみしやぎ。大鐮にて人を引切り。討手の大將海野の太郎を。てつべいから爪先迄擲き碎いて候と。地申上ぐれ

ば大將呆れ。川越太郎ははつとばかり。

へエしなしたりひろいだり。討手の大

將討取つては御連枝和陸の願も叶はず。

不便や娘も詮なき犬死。是非もなき世

の有様と。悔涙に義經公。岡古人は人を

恨みず。傾く運のなすわざと思へば恨も

悔もなし。武藏が不肯を幸ひに。都を開

かば輪命も背かず。兄頼朝の怒も休まる。

是を思へば卿の君が最期。残り多やと

御涙皆夢の世の有爲轉變。我も浮世に捨

てられて驛路の鈴の音聞かん。龜井駿河

供せよとッシ立出で給へば。川越太郎

しをれながら暫しと留め。床に飾りし鼓

携へ。因君多年御懸望ありし軍寶殘し置

かれては。取落されしと申すも殘念。院勅

に打つといふ聲ありとは。皮より穢れし

讒者の詞。打つを拙者が調べ換へ。再

び御速枝ぐはいの取持。長路の旅の御物

忘れとッシ心をこめて差出す。義經御

手にふれ給ひ。親しき兄弟の因をば打

切らるゝも運の盡き。結び返せよ川越と。

駿河龜井を御供にてすこゝ館を出で

給ふ。御心根のいたはしさ見送る。人も鎌

倉へ是非なくも立歸る世の成行ぞ。

是非もなき。跡は貝鉦聞聲震動する

も理や。武藏坊辨慶が海野の太郎を討取

つて。序に土佐坊せしめてくれんと。追

駈け廻つて正尊が。乗つたる馬の尻邊に

乗り。ぼつ立て蹴立て白洲の庭。館もゆ

るぐ撞鐘聲。ノリヤアノ我が君やおは

する。討手に向ひし海野は粉にして土佐

坊めを生捕つたり。龜井駿河は何國に居

る。武藏が料理の喰殘し賞瓶せぬかと呼

ばはつても。館はひつそと靜まつて。

答へる人もなきふしぎ。不思議くとッシ

見廻す内。坂東一の土佐坊か腰の上帯

引切つて。馬より飛下り大聲上げ。者ど

も来れと下知の内。兵具の兵數百人ッ

レ。討取れと押取りまく。武藏も馬より

一足飛。太刀も刀も驚づかみ。鳴づかみ

の首の骨。握るときれる數萬力雨か故か

人確。隙間を見て土佐坊が武藏が弱腰し

つかと抱く。シヤ小僧めが味をやる。

腰の療治で捻るか揉むか。擦つておけ

ろのッシぶりどさり。尻餅ついで

も怯まぬ曲者。四尺に餘る大刀物。討

つてかゝれば閃りとはづし。江戸てう

ど切れば柄先で。しやんと請けとめ。ホ

ホ、出かす。腰をさすつた其代り。

首筋ひねつてくれんすと。はつしとは

ねて身をかはし。大太刀蹴落し素首掴み

フシぐつと引寄せ。腰にひつ付け。我

が君様。御臺様。龜井やい。駿河やいと

引すり廻り呼廻り尋ね廻れど人々の御行

方も見えざれば。扱は此家を落ち給ふか。

コハ何ゆゑと身の科と思ひやらねば言ふ

人も。答ゆる人も楯の烏泣いて詫する土

佐坊を。右をフシ左へ持直し。自體此奴が逃廻り。隙取つた故お供におくれた。おのれが首の飛ぶ方が我が君様の御行方。よい投算と引掴み。ちよつべい天窓を頭巾越し。すばりと抜いて空へ投げ。けたる方は巽の間。元は牛若丑の方。巳午もよしや吉野も氣づかひ。程はあるまい追付かんと。思ひ爲し事も。今になつては未申。思ひ違ひの荒者が。あら砂蹴立つる響はどうくどろくどろ。踏みしめく踏みならし。跡を眞の刻風を。起して追うて行く

第二

吹く風にフシつれて閉ゆる。閑聲の物すさまじき。フシ気色かな。昨日は北殿の守護今日は都を落人の。身となり給ふ

九郎義經。數多の武士もちりくになり龜井六郎駿河の次郎。主従三人大和路へ夜深に急ぐ旅の空。跡振返れば堀川の御所も一時の雲煙。浮世は夢の伏見道。シ稻荷の宮居にさしかれば。六郎後馳せに驅付け。正しくあの閑聲は鎌倉勢後を見するも無念なり。蒙つて一合戦仕らんと。申上ぐればいと重清。都にて舅川越太郎が言つし鎌倉殿の憤り。明白に言開き。卿の君のあへなき最期も。義經が身の言譯なるに。早まつて辨慶が海野の太郎を討つたる故。止む事を得ず都をひらくは。親兄の禮を思ふ故此後は猶以て。鎌倉勢に及向はば。主従の縁もそれ限りと。仰に二人も腕撫でさすり。フシ拳を握つて扣ゆる折から。義經の御跡を慕ひこがれて靜御前。帳つ。轉びつ來りしが。それと見るより綻りつき。胸怒な我が君と暫し。涙に咽びし

が。武藏殿を制せよとわしをやつた其跡で。早御所をお退と聞き二里三里後れうとも。追行くは女の念力。ようもく惨たらしう。この靜を捨置いて二人の衆も聞えませぬ。私も一所に行くやうに執成言うて下さんせと。スエ敷けば共義經も。情にフシ弱る御心。見えて取つて駿河の次郎。主君も途すがら噂なきにはあらねども。行く道筋も敵の中。取分けて落行く先は多武の峯の十字坊。女義経同道なされては寺中の思はく如何なりと。隠し宥むる時しもあれ。武藏坊辨慶息を切つて馳着き。土佐坊海野を仕舞うてのけん。都に残り思はず遅参仕ると。言ひもあへぬに御大將。扇を以て丁寧き立て。坊主びくとも動いて見よ。義經が手討にすると。御怒の顔色に思ひがけなき武藏坊。フシはつと恐れ入りける

が。此間大内にて。朝方殿に悪口せしとて御勘當。永々仕出もせざりしが靜様の訛言で御免あつたは昨日今日。其勘當のぬくもりが手の中にほのく。まだまだめ切らぬ其中に。又候や御機嫌を損うたさうなれど。辨慶が身に取つて不調法せし覺なし。御ヤア覺なしとはいはれまい。鎌倉殿と義經が。兄弟の不和を取結ばんと川越が實義。卿の君が最期を無下にして。義經が討手に上りし。鎌倉勢をなぞ切つた。是でも汝が誤であるまいか。サア返答せよ坊主めと。是はつたと脱んで宣へば。武藏は返す詞もなく。フシ頭も上げず居たりしが。御憚りながら其事を存せぬにてはあらねども。正しく御所の耐手として上つたる土佐坊。いかに御意が重いとて主君を狙ふをまじくと。見て居る者のあるべきか。さある時は日本に忠義の武士は絶果てなん。誤りならば幾

重にもお訛言仕らん。いかに御家來なればとて餘り惨い呵りやう。是といふも我が君の漂泊より起つた事。無念々々と拳を握り。竟に泣かぬ辨慶がたしない涙をこぼせしは。フシ忠義故とぞ知られける。靜も武藏が心を察しあれ程にいうてちやのに。どうぞまあ御了簡と。柔かな訛言の。其尾について龜井駿河。スエテ御免御免と訛びければ。義經面を和げ給ひ。母が病氣で故郷へ歸りし。四郎兵衛忠信を。我が供に召連れば武藏が訛は聞かねども。行先が敵となつて。一人でもよき郎等を力にする時節なれば。此度は赦し置くと。御仰に辨慶はつとばかりに頭を下げ。坊主頭を撫廻し。これに怒りよ武藏坊。ア、靜様は重々の訛言。フシいかいお世話と悦べば。ママアお訛がすんでめでたい。是からは此靜が君のお供をする様に。執成頼む武藏殿と。フシ思ひ詰め

たる其風情。今訛言頼んだとて當り眼な返報。義理でもあつと申したけれど此辨慶其意を得ぬ。御家來さへ跡先に引別れて行く忍びの旗。落着く所は豫て聞き置く多武の峯。是以て女は叶はず。夕に變る人心なれば。十字坊の所存も量りがたし。是より道を引違へ。山崎越に津の國尼が崎。大物の浦よりお船に召し。豊前の尾形を御頼み有らうも知れず。それなれば長の船路。猶以てお供はなるまい。おふつりと思ひ切つて都に止り。君の御左右を待給へと。言ふにわつと泣出し。今迄お傍に居た時さへ片時お目にかゝらねば。身も世もあらぬ此靜何時又逢はれる事ちややら。行先知れぬ長の旅跡に残つて一日も。何と待つて居られうぞ。如何なる憂目に逢ふとて。ちつとも厭はぬ武藏殿。連れていて下さんせと涙ながら我が君に。ひしと抱付き。フシ

離れ。がたなき風情なり。靜が別れに判官も目をしばたゝきおはせしが。只今武藏が言ふ通り行先知れぬ旅なれば。都に残り義經が迎ひの船を待つべしと。

龜井に持たせし錦の袋。それ此方へと取出し。同是こそ年來義經が望をかけた初音の鼓。此度法皇より下し賜はり。我が手には入りながら。一手も打つ事なりがたきは。兄頼朝を討てと有る院宣の此鼓。打たねば連勅の科遁れず。打てば正しく鎌倉殿に敵對も同然。二つの是非を分け兼ねたる此鼓。身を離さず持つたれども。又逢ふ迄の形見とも。思うて朝夕慰めと。ハムシ渡し給へば。手に取上げ今迄はさりともと思ふ願も綱も断れ鼓をひしと身に添へて。エエかつばと伏して泣き居たる。龜井の六郎進み出で。同長詮議に移り土佐坊が残黨。討つて來らば御大事と。重清に諫めら

れ涙と共に立給へば。靜は其儘我が君の御袖に縋りつき。わし一人振捨てられ焦死に死なんより。淵川へも身を投げた。死ぬるゝと泣叫べば。人々も持餘し。

調過ち有つては我が君の御名の疵。何とせん方駿河の次郎。立寄つて會釋もなぐ取つて引逃げ。幸ひの縛り繩と鼓の調引きほどき。靜の小腕手ばしかく。過ちさせぬ小手縛。道の枯木に鼓と共に。雁子絡に括りつけ。同サア邪魔は拂うたり。急ぎ行く。ハムシ跡に靜は。身をもがき。我が君の後影見ては泣き泣いては見。エエ胸忿な駿河殿。情にてかけられた縛繩が恨めしい。引けば悲しやお形見の鼓が損ねう何とせう。ほどいて死なせて下されと。聲をばかりに泣叫ぶは。フシ目も當てられぬ次第なり。落行く義經通さじと土佐が郎等逸見の藤太。數多の雜兵め

いゝ松明腰挑燈。道を照らして追つかけしが。枯木の蔭に女の泣く聲。何者ならんと立寄つて。同ヤア此奴こそ音に聞く義經が美靜といふ白拍子繩迄かけて。あてがうたはうましゝ。此鼓も義經が重寶せし初音といふ鼓ならん。此道筋に判官も隠れ居るに疑なし。福徳の三年目

り。フシ引立て行かんとする所へ。四郎兵衛忠信。君の御跡慕ひ來て。斯くと見るより飛びかゝり。藤太が肩骨ひつ掴み。初音の鼓を奪返し宙に提げ二三間。取つて投退け靜を圍ひ。ふんちかつて。フシ立つたるは心地よくこそ見えにけれ。同ヤア忠信殿好い所へ。能う見えたと悦べば。逸見の藤太。同叔は忠信よき敵。搦捕つて高名せんと。ばらゝと追取りまく。同ヤアしをらしいうんざいめら。ならば手柄に搦て見よと。いはずせも

立てず双方より。同捕つたとかゝるを引外し。首筋擱んでえいやつと。地右と左へ筋斗打たせ隙間もなく後より。大勢抜き運れ切つてかゝれば。心得たりと抜合せ。茅花の穂先と閃めく刀を。飛鳥のごとく飛越え跳越え駆け廻り。肩間、體難題れば、ッシわつとばかりに逃退いたり。後れて逃ぐる逸見の藤太が。素首つかんでどうど投げ足下に踏へ。同汝等が分際で此鼓を取らんとは。胴より厚き面の皮。打破つてくれんすと。地ぼん／＼と踏みめせば。ぎやつとばかりを最期にて。ッシ其儘息は絶果てたり。素鳥居の本の木蔭より義經主従かけ出で。珍しや忠信と。仰を聞くよりはつとばかり。こは存じよらぬ見參と。飛びささつて手をつけば。龜井駿河武藏坊。ッシ互に無事を語りあふ。忠信かさねて頭を下げ。同先づは變らぬ君の尊顔。拜し申して拙

者も安堵。某も母が病氣見舞の爲お暇賜はり。生國出羽に罷下り水々の介抱。程なく母も本復致し。罷上らんと存する中。君腰越より追返され。鎌倉殿御兄弟御中不和と承るより。取る物も取敢へず都へ歸る道すがら。地土佐坊君の討手と聞き夜を日に次いで堀川の御所へ今晚駆着けしに。調早や都を開かせ給ふと。聞くよりは是迄御跡慕ひ。思ひがけなき静様の御難儀を救ひしは。我が存念の届きし所と。申上ぐれば御悦喜有り。同我も當社へ參詣して今の働き委しくも見届けたり。鎌倉武士に双向ふなと堅く申付けたれど。土佐坊討たれし上からは其家來を。忠信が討つたるとて構ひなし。地今に始めぬ汝が手柄適々取り分けて。同兄權信も我が矢面に立つて討死したるは稀代の忠臣。其弟の忠信なれば。我が腹心を分けしも同然。地今より我が姓名を譲り清和

天皇の後胤。源の九郎義經と名乗り。まさかの時は判官に成代つて敵を欺き。後代に名を止めよ。是は當座の褒美とて家來に持たせし御着長。ッシ忠信にたびければ。地はつとばかりに押藏き。頭を土にすり付け。同土佐坊づれが家來を追散せしと有つて。御着長を下し賜はる其上に。地御姓名まで賜はるは生々世世の面目。武士の冥加に叶ひしと。天を禮し地を拜し。ッシ悦涙にけれければ。地判官重ねて。同我は是より九州へ立越え。豊前の尾形に心を寄せん。地汝は靜を同道して都にとゞまり。萬事宜しく計へと。地君は靜に別れを惜み便もあらは音信れんさらば。と立ち給へば。今が實の別れかと立寄る靜を武藏坊。龜井駿河立隔て押隔つれば忠信も。ッシ我が君に暇乞と互に。無事をうなづき合ひ。歎く靜を押退け。心強くも主従四

人。山崎越に尼が崎。ソソ大物さして出で給ふ。コレなう暫し待つてたべと。行くを制止むれば。御行方を打守り。御容顔を見るやうで。戀しいわいのと地に平伏し。ヌエ正躰もなく泣きければ。御ヲ、道理々々さりながら。別れも暫し此鼓。君の形見とあるからは。君と思つて肌身に添へ。憂さを晴らさせ給へやと。下し賜はる御着長。ゆらりと肩に引つかたげ。ヘルシ宥めく。手を取れば。ヒロヒ靜は泣くく。形見の鼓肌身に添へ。盡きぬ名残に咽せかへり。涙と。共に道筋をたどりく。て。三更行く空の。毎夜毎日毎の入船に濱邊賑ふ尼が崎。大物の浦に隠れなき渡海屋銀平。海を抱へて船商賣店は帆帆木綿。上り下りの積荷物。運ぶ船頭水主の者人絶のなき船間屋。ソソ世をゆるがせに暮しける。夫は積荷の間屋廻り。内をまかなふ女房おりう。宿借

り客の料理拵へ。所柄とて網の物塩辛い塩梅も。甘う育ちし一人娘。お安がついの轉寝にオクリ風ひか。さじと裾に物奥の襪をぐわらりと明け。風呂敷わいがけ旅の僧によきく。と立出づれば。是はマアお客僧様。今御膳を出しますに何處へお出なさる。ぞ。さればく。西國への出日相待つて。連ども迄もほつと退屈。只居よ。よりは西町へ往て買物をして來ませう。是はく。残り多い。外のお客へは鳥貝簞。御出家には精進料理分だつて拵へたに。ついあがつてござらぬか。イヤく。愚僧は山伏なれば精進せぬ。鳥貝簞よかろぞや。それでもお前。今日は二十八日で不動様の御縁日。ほんにさうぢや。大事の精進。ハテナんとしよしよ事がない。往て來ませうとふいと立ちあいたあいたく。アハアお客僧様何となされた。イヤ別のことでもないが。寢て居るは爰

のお娘か。此子の上を踏越えなれば。俄に足がすくばつて。エ、聞えた小さうても女子なれば。虫が知らしてしやきばつた物である。ヤア大降のせぬ中に。往て來ませうと武藏坊。ばつてふ笠引冠り。ソソ何處ともなく急ぎ行く。母は娘の傍に寄りコレお安。其様に轉寝して。風ひいてたもるなやと。抱き起せば目を擦りく。母様。お前のなさる事見て居て。ついとろく。と一腰入。ヲ、それならば目を覺して。今朝留うた清書を。とつくりとよう書いて。父様のお目にかきやと。子には目のなき親心。ソソ手を引き納戸に入りける。所へ誰とも知らぬ鎌倉武士家來引具し。亭主に逢はうと内に入れれば。女房驚き走り出で夫は他行何の御用と尋ねれば。自身は北條が家來相模五郎といふ者。此處義經尾形を頼み。九州へ逃下るとの

風聞によつて。鎌倉殿の仰を請け。主人時政の名代として。討手に只今下れども。打續く雨風にて船一艘も調はず。幸ひ此家に借り置いたる船。日和次第出船と聞く願ふ所なれば。其船身どもが借請け船を押切つて下らんず。旅人あらばばいまくり座敷を明けて休息させい。早う早うと權威を。フシ見せて延し上れば。地女房はつと返答に當惑しながら傍に寄り。御大切な御用に船がなうて無御難儀。手前のお客も二三日以前より。日和待して御逗留。今更船を斷いうて。お前の御用にも立てがたし。殊に先様も武士方なれば。御同船とも申されず。何とぞ御了簡あつて。今夜の所をお待ちなされて下さらば。其中には日和も直り何艘もく。入船の中を借り調へて上げませう默れ女。御逗留がなれば汝等にはいひつけぬ所の守護へ横付にいひつくる。奥の侍

が怖うて汝らが口から言難くば。身どもが直に言ふべいと。すんど立つ扶にすがり。御おせきなさるは御尤なれども。お前を奥へやりまして。直に御相對さしましては船宿の難儀。何分夫の歸らるゝ迄。御待ちなされて下されと手を擦り詫びれどヤアしちくどい女郎奴。奥の武士に逢はさぬは。察する所平家の餘類か。義經の所縁の者。商家來ぬかな油斷すなど。止むる女房を撥退け突退け。又取付くをあらけなく踏倒し蹴倒すを。戻りかゝつて見る夫。走り入つてかの侍が手を取つて。眞平御免下さるべし。則ち私此家の亭主渡海屋銀平。御立腹の様子我等に仰下さるべしと膝を折り手をつけば。ムウ汝亭主なら言つて聞かさん。身は北條の家來なるが。義經の討手を蒙り。奥の武士が借つたる船此方へ借りたため。奥へ陥込み身が直に其武士

に逢はうといへば。わが女房が遮つて止むる故に今此仕儀。ヘエ憚りながら。そりやお前が。御無理な様に存じられます。何故と仰しやりませ。人の借つて置いた船を。無理に借らうと仰しやりますは。ナア御無理ちやござりませぬか。其上にまだ。宿かりの座敷へ陥込まうとなされたを。やらんとおつしやつて女房どもを踏んだり蹴たりなさるゝは。お侍様には似合ひませぬ様に存じます。此家にも一夜でも宿致しますれば。商旦那様。座敷の中へ陥込ましては。どうも私がお客様へ立ちませぬ。何うぞ御了簡なされて。お歸りなされて下さりませ。イヤ素町人め。鎌倉武士に對つて歸れとは推參。是非奥へ陥込むと反打返してひしめけでござりませよ。私も船問屋はして居ますれど。聞きはつつてをりますが。惣別

分脇差では。人切る物ぢやないげにござります。お侍様方の二腰は身の要害、人の

危忽狼藉を防ぐ道具ぢやとやら承りまして。さるによつて武士の武の字は戈を止

むるとやら。書きますげにござります。ヤア小癩な奴め。嗚ける頬げた切裂かんと

抜打ちに切付くる。引外して相模が利腕むしずと取り。コリヤもう了簡がならぬ

わい町人の家は武士の城郭。敷居の内へ泥鰌を切り込むさへあるに。此刀で誰を

切る。其上に平家の餘類の。イヤ義經の所縁などと。旅人を威嚇すのか。よし

又。判官殿にもせよ。大物に隠れなき。眞綱の銀平がお匿ひ申したら何とする。

サア眞綱が控へた。ならばびくとも動いて見よ。素頭微塵にはしらかし命を取柄

此世の出船と。刀もぎ取り宙に提げ持つて出で。門の敷居にもんどり打たせば。死に入るばかりの痛をこらへ頬をしか

めて起上り。亭主め能く覚えて居よ。此返報にはうぬが首さらへ落す覺悟せ

よ。また頬げた叩くかと庭なる礎をぐつと差上げ。微塵になさんと投付くれば。

疾風に遭うたる小船の如く。尻に帆かけて主従はッッ跡を見ずして逸失せける。

ホ、ウよいざま〜と烟草盆引寄せ。何と女房。奥のお客人も今のもやくやお聞きなまつたで有らうなと。女夫が

私語く咄し聲。ヘルッ濡れ聞えてや。一間の襖押開き義經公。旅の艱苦に寒れ果て

たる。ッ御容顔。駿河龜井も跡に従ひ立出づる。こは存じよりなやと。夫も

俄に膝立直し夫婦諸共手を下ぐれば。隠すより顯るゝはなしと。兄頼朝の不興

を受け世を忍ぶ義經。尾形を頼み下らんと此所に一宿せしに。其方よく重り知

つて。時政が家來を追退け。今の難儀を救うたるは業に似ぬうい働き。我一の谷

を攻めし時。鷲尾といへる木樵の童に。山道の案内させしに。山樵には剛なる者

故。武士となして召使ひしがそれに優つた汝が働き。あつばれ昔の義經ならば。

武士に引上げ召使はんに。あるに甲斐なき漂泊の身と。武勇烈しき大將の。身

を悔みたる御詞。駿河龜井も諸共に。無念の拳を。握りける。是は〜有難

い御仰。私も此界限では。眞綱の銀平とて。人に知られて居ますれど高が町人。

今日の働きも畢竟申さば薩將軍。些細な事がお目にとまつて。我々速に御復

美の御詞冥加に餘る仕合せ。殊に君を見覺え奉るは八島へ赴き給ふ時。渡邊福

島より兵船の役にさ〜れ。拙者が手船も御用に達し。一度ならず此度も。不思議

にお宿仕るも深き御縁。さるによつてお爲を存じ申上げたきは。北條が家來取つて返さば御大事。一刻も早く御乗船然る

べしと。いひもあへぬに駿河の次郎。我々も其心。此天氣にて御出船は如何あらん。ア、それをぬかつてよござりまじよか。弓矢打物はお前方の業。船と日和を見る事は舟問屋の商賣。昨日今日は辰巳。夜半には雨も上り。明方には朝嵐に變つて。御出船には引拔の上々日和。數年の功にて見置いたと。見送す様にいひけるは、其道々と知られける。龜井の六郎すんど立ちヲ、銀平出かしたり。其方が詞について雨の晴間に片時も早く。主君の御供仕らんと申上ぐれば、義經公。船中の事は銀平が宜しく計ひ得させよと。仰にはつと頭をさげ。只今も申す通り。幼少より船の事はよく鍛錬仕れば、御見送りのため拙者も手船で須磨明石の邊迄參らん。元船の在所は五町あまり沖の方。舟は即ち日吉丸思ひ立つ日が吉日吉祥。我も雨具の用意を致

し跡より追着き奉らん女房。君を御見立て申せと言捨て、ッ納戸に入りければ。地妻は心得御身をば隠れ蓑笠參らする。ヲ、心遣ひ忘れじと。龜井駿河諸共に蓑笠取つて被せ參らせ。二人も手早く紐引きしめいさせ給へと主従三人。打連立つて濱邊に出で豫て用意の舳舟に、ッ召し給へば。兩人も飛乗りく。サア、船頭仕れと。講解けは女房。門送りして舟場を下り。御武運目出度くましまして。御縁もあらば重ねて御目にかゝるべしさらば。に船を押立て沖へ出船女房は。フシいきせき内へ入相時。ア、心せかれやと。ホッ火燈。ならして油さし神棚お上に灯をてらし。娘々お安くと呼出し。御暮方に手習もおきやらいで。今夜は父様侍衆を。元船迄送つてなれば。和女も腰る迄爰に居や。ほんに主とした事が。千里萬里も行く様に身拵へ。もう

日も暮れた。用意がよくばいかしやんせと。呼べどぐつとも答なし。もし晝の草臥で轉殿ではあるまいか。阿銀平殿と呼立つれば。御抑は桓武天皇九代の後廂。平の知盛幽靈なり。ナホス阿ノ渡海屋銀平とは假の名。新中納言知盛と實名を顯はす上は。地長ありと娘の手を取り。上座に移し奉り。君は正しく八十一代の帝。安徳天皇にて渡らせ給へど。源氏に世をせばめられ。所詮勝つべき軍ならねば。玉體は二位の尼抱き奉り。知盛諸共海底に沈みしと欺き。某供奉して此年我が子と呼び。時節を待ちしかひ有つて。九郎大夫義經を今宵の中に討取り。年來の本望を達せんは。ハア、悦ばしや嬉しやな。典侍の局も悦ばれよと。勇め顔色風あつて猛く。平家の大将知盛とは其骨柄に、ッ顯れし。扱は常々の

御願ひ。今夜と思し立ち給ふな。御わきて九郎はすゞき男。仕損じばし給ふな。ヲ、それにこそ術あり。北條が家來

相模五郎といひしは。我が手下の船頭ども。討手と偽り狼藉させ。某義經に加搦人の體を見せ心をゆるませ。今夜の難風を日和と偽り。船中にて討取る術なれども。知盛こそ生残つて。義經を討たん

なりと。沙汰あつては末々君を御養育もならず。重ねて頼朝に仇も報はれず。さるによつて某人數を手配り。舟にて勝

よりぼつ着き。義經と海上にて戦はば。西海にて亡びたる平家の悪靈。知盛が怨靈なりと雨風を幸ひに。彼等が眼を眩ません爲。我が形もこの如く。怪しく見する白糸絨。此白柄の長刀にて。九郎が首

取り立歸らん勝負の合圖は大物の沖に方つて。挑燈松明一度に消えなば。知盛が討死と心得。君にも御覺悟させまし。

御骸見苦しなき様に。ヲ、跡氣づかはすと好き左右を知らせてたべ。知盛早うと勅。こは有がたしと龍顔を。拜し申せば

おとなしき。フシ八つの太鼓も御年の。數を象る合圖のしらせ。はやお暇と區ゆふなみに。長刀取直し。巴波の紋あたりを拂ひ。砂を蹴立て。早風につれて。

ナハス。眼をくらし飛ぶが如くに。三更へかけり行く。跡見送つて典侍の局。御傍に差寄つて。今知盛の仰しやつたを

ようお聞きなされたか。稚れども十善の君。このさもしき御妾にては軍神への恐れ有り。御装束と立上り。まさかの時は諸共に。冥途の旅の死装束と心に籠めし納戸口。フシ涙隠して入りにける。

ハルシ夜もはや次第に。更け渡り。雨風烈しく聞ゆれば。今頃は知盛の難儀しやらんいとほしやと。ねびさせ給へば只管に。スエ案じ詫びたる御氣色。程なく局

は山鳩色の御衣冠。恭しく臺に載せ。其身も共に衣服を更め一間を出で。片時も早く御装束と御傍に立寄り。腕の上着を脱ぎかへて。下の衣上の衣。ハルシ御

衣冠に。至る迄召さしかゆれば綺麗に。始の御妾引きかへて神の御末の御粧ひ。フシいと尊くも見え給ふ。サア是から

は知盛の吉左右を待つばかりと。そよとの音も知らせかと胸とどろかす太鼓鐘。すはや軍真最中と君のお傍に引添うて。

知らせを今やと待つ折から。知盛の郎等相模五郎。息つきあへず馳着けば様子は如何に。早う聞かせよくとフシ局もせきにせき立つたり。されば豫ての術の通り。暮過より味方の。小船を乗出し。

義經が乗つたる元船間近く漕寄せしに。折しも烈しき武庫山嵐に連れ降りくる雨雷。時こそ來れと水練得たる味方の勢。皆海中に飛込み。西國にて亡

ひし平家の一門。義經に恨をなさんと聲に呼ばはれば。敵に用意やしたりけん挑燈松明ばら〜と味方の船に乗移り。爰を先途と戦へば味方のかり武者大半討たれ。事危ふく見え候。某は取つて返し。主君知盛の御先途を見届けんと。申し申すもあへず駈けり行く。大事が起つて来た。さるにても知盛の御身の上氣遣はし。沖の様子は何ならんと一間の戸障子押明ければ。挑燈松明星のごとく。コト天を焦せば漫々たる海も一目に見え渡り。數多の小船遣り遠へ〜。船棹を小楯に取り。敵も味方も入亂れ舟を。飛越え陸越えで。追つ捕つつえい〜聲にて切結ぶ。人影までもあり〜と戦ふ聲々風に連れ。ハズミ手に取るやうに聞ゆるにぞ。御覽ぜあの中に知盛のおはすらん。やよいづくにと伸上り。見給ふ中に挑燈松明。次第

次第に消失せて、沖も。ひつそと鎮まれば。是こそ知盛の討死の合圖かと。餘り呆れて泣かれもせず。エ途方に。くれて立つたる所に。入江の丹藏朱になつて立歸り。義經主従手いたく動き。味方残らず討死まつた主君知盛も。大勢に取りまかれ既に危く見えけるが。かいくれに御行方知れず。必定海に飛込んで御最期と存すれば。冥途の御供仕らんといひもあへず諸肌くつろげ。持つたる刀腹に突立て汐の深みへ飛込めば。ヤア扱は知盛もあへなく討たれ給ひしか。はつとばかりにどうど伏し前後も知らず泣きければ。君も見る事聞く事の。悲しさ。怖さを取りまぜて共に。涙にくれ給ふ。楯局は歎の中よりも君を膝に抱き上げ。御顔つく〜と打守り。二條餘りは此見苦しき荒屋を。玉の臺と思召しての御住居。朝夕の供御也も。同下々と同じ様に

さもしい物。それさへ君の心では。殿上にての榮華とも思うてお暮しなされしに。知盛お果てなされては賤が伏屋に御身一つ。置き奉る事さへもならぬやうに成果てて。終には此浦の土と成り。給ふかや。上もなき御身の上に悲しい事の數々が。續けば續くものかいのと。〜とどき立て〜身も浮く。ばかり歎きしが。阿、よしなき悔みごと御覺悟念がんと。涙ながら御手を取り。涙なく〜へ濱邊に出でけれど。いと尋常なる御姿此海に沈めんかと。思へば目もくれ心もくれ。エ身もわな〜とぞ頼ひける。君はさかしくましますぞ。死する事とは露知り給はずコレなう乳母。悟々々というて。いづくへ連れて行くのちやや。ヲ、さう思召すは理。コレようふ聞き遊ばせや。この日本にはな。源氏の武士蔑りて恐ろしい國。此波の下にこ

そ。極樂浄土というて結構な都がござります。其都には。祖母君二位の尼御を始め。平家の一門知盛もおはすれば。君も其處へ御幸あつて。物憂き世界の苦しみ。免がれさせ給へやと。地宥め申せば打消れ給ひ。あの恐ろしい波の下へ。只一人行くのかや。阿、勿體ない。此お乳が美しう育上げたる玉體を。あのなん／＼たる千尋の底へ遣りまして。何と身も世もあられうぞ。此お乳もお供する。いとし可愛の養君。何とお一人やられうぞ。地それなら嬉しい。阿そなたさへ往きやるならば。何國へなりとも往くわいの。地ヲ、よういうて給はつたと。引寄せ／＼抱きしめ。火に入り水に溺るゝも前の世の約束なれば。未來の誓ひましまして。阿天照大神へ御暇乞と。地東に向はせ参らすれば。平家美しき御手を合せ。伏拜み給ふ御有様。見奉れば氣も消え

／＼。ナホス阿ヲ、ようお暇乞なされたなう。佛の御國は此方ぞと。平家指さす方に。向はせ給ひ。今ぞ知る。御裳川の流には。波の底にも。都ありとは。ナホスアと詠じ給へば。阿ヲ、お出かしなされた。ようお詠み遊ばした。其昔月花の御遊の折から。斯様に歌を詠み給はば。父帝は申すに及ばず。祖父清盛公二位の尼君。取りわけて母門院様。なんぼう悦び給はんに。地今はの際に是がマア。言ふにかひなき御製やとかきくどき／＼涙の限り壁限りヲん歌きくどくぞ道理なる。地局は涙の隙よりも。御焚搔上げ搔撫でて今ははや。平家極樂への御門出を急がん

義經。駈寄つて抱留め給へばなう悲しや。見赦して死なせてたべと。振返つてヤア此方は。壁立てなと帝を小腕にひん抱へ。局の小腕ぐつと捻上げ。無理無體に引立て／＼オオ、一間のへ内に入り給ふヘルツかゝる所へ。地知盛は大童に戦ひなし。鎧に立つ矢は衰毛の如く。絨も朱に染めなして。我が家の内に立歸れば。跡を慕うて武藏坊表の方に立聞くと。しらず知盛聲を上げ。阿天皇はいづくにまします。お乳の人。典侍の局と呼ばはり／＼どうど伏し。阿エ、無念口惜しや。是程の働に弱りはせじと。長刀杖に立上り。お乳の人。我が君と。地よるばひ／＼駈廻れば。一間を踏明け九郎判官帝を左手の小脇にひん抱き局を引付けヲん突立ち給へば。地あら珍しやいかに義經。地思ひぞ出づる浦浪に。知盛が沈みし其有様に。又義經も微塵になさんと。ナホス長

刀。取直し。同サアく勝負と詰寄れば。義経も少しも騒ぎ給はず。同ヤア知盛さなせかれそ。義経がいふ事ありと。帝を典侍の局に渡し。フシづくと歩み出で。同其方西海にて入水と偽り。帝を供奉し此所に忍び。一門の仇を報はんとはあつばれく。我我家に逗留せしより。凡々ならぬ人相骨柄察する所平家の落人。同辨慶に言合め帝を探る計略。過つて踏越えしに。果して武藏が五躰のしびれ。其上我に加擔人の躰を見せ。心をゆるさせ討取る術。我其事を量知り。解の船頭を海へ切込み。裏海へ船を廻し疾よりはへ入込んで。始終委しく見届け帝も我が手に入れたれども。日の本をしろしめす萬乗の君。何條義経が擒にするいはれあらん。一旦の御艱難は平家に血を引き給ふ故。今某が助け奉つたるとて不和なる兄頼朝も。我が誤とはよも言ふ

まじ。必ずく帝の事は氣づかはれそ知盛と。聞く嬉しさは典侍の局。同ヲ、あの詞に違ひなく先程より義経殿。段々の情にて天皇の御身の上は。知邊の方へ渡さうと武士の堅い誓言。悦んでたべ知盛卿と。聞くに渡つたる氣も逆立ち局を取つて突退け。同エ、無念口惜しや。我一門の仇を報はんと。心魂を碎きしに。今夜暫時に術廻れ。身の上迄知られしは天命々々。まつた義経帝を助け奉るは。天恩を思ふ故是以て知盛が。恩にきるべきいはれなし。同サア只今こそ汝を一太刀。亡魂へ手向けんと。痛手によろめく足踏みしめ。長刀押取り立向ふ。辨慶押隔て。打物わざにて叶ふまじと。珠數さらくと押揉んでいかに知盛。同かく有らんと期したる故。我も今朝より船手に廻り。計略の裏をかいたれば。最早惡念發起せよと。持つたる奇高知盛の。

フ首にひらりと投げかくれば。扱は此珠數をかけたのは。知盛に出家とな。エ、汚らはし。同押四姓始つて。討つては討たれ。討たれては討つては源平の習ひ。生き變り死にかはり。恨をなさて置くべきかと。思込んだる無念の顔色。眼血ばしり髪逆立ち。此世から惡靈のツシ相を顯はすばかりなり。かくと聞くより龜井駿河主君の身の上氣遣しと。追々駆付け取廻せば。御幼稚なれども天皇は始終の分ちを聞召し。知盛に向はせ給ひ。同朕を供奉し。永々の介抱は其方が情。今日又唇を助けしは。義経が情なれば。仇に思ふな知盛と。勿體なくも御涙を浮め給へば典侍の局共に涙にくれながら。同ヲ、能うおつしやつた。何時迄も義経の志必ず忘れ給ふなや。源氏は平家の仇敵と。後々迄も此お乳が。帝様にあだし心も付かうかと人々に疑はれん。さあれ

は生きてお爲にならぬ。御君の御事くれぐれも頼み置くは義経殿と。用意の徳劔咽に突立て名残惜げに御顔を。打守りくさらばとばかりを此世の暇。申し

あへなく息はたえにける。思ひ掛けぬ局の最期。君は猶更知盛も。重なる憂目に勇氣も碎け暫し詞もなかりしが。天皇の御座近く涙をはらくと流し。因果報はいみじく一天の主と生れ給へども。西海の波に漂ひ海に。臨めども沙にて。水に渴せしはこれ餓鬼道。ある時は風波に遭ひ。お召の船を。荒磯に吹上げられ。

今も命を失はんかと。多くの官女が泣き叫ぶは。阿鼻叫喚。陸に源平戦ふは。取りも直さず修羅道の苦み。又は源氏の陣所陣所に數多胸の嘶くは。畜生道。今賤しき御身となり人間の憂難。目前に六道の苦みを受け給ふ。是といふも父清盛。外戚の望あるによつて。姫宮を御男宮と

いひふらし。權威を以て御位に即け。天道を欺き。天照大神に偽り申せし其惡逆。積りく一門我が子の身に報うたか。

官に。仇をなせしは知盛が怨靈なりと傳へよや。詞サアく思ある其中に。片時も早く帝の供奉を。頼むくと申しよろ



フシ是非もなや。我がかく深手を負うたばひ立てば。我は是より九州の尾形れば。存へ果てぬ此知盛。只今此海に沈方へ赴くなり。帝の御身は義経が何國迄んで末代に名を残さん。大物の沖にて判も供奉せんと。御手を取りて出で給へば

龜井駿河武藏坊。フシ御後に引添うたり。

知盛莞爾と打笑みて。昨日の仇は今日の味方。あら心安や嬉しやな。是ぞ此世の暇乞と振返つて龍顔を。見奉るも目に涙

今は名残に天皇も。見返り給ふ別れの門出。止まる此方は冥途の出船。コハリ三途の海の潮踏せんと碇を取つて頭にかづ

き。さらばくも聲ばかり。渦巻く波に飛入つてヘルシあへなく消えたる忠臣義

心。其亡骸は大物の。千尋の底に朽果てて。名は引汐にゆられ流れ。くつて跡し

ら波とぞなりにける

第三

歌三芳野は丹後武藏に大和路やわけて。

名高きナホスシ金峯山。地蔵王彌勒の御寶物。御開帳とて野も山もオタリ賑ふ。道の傍に。長地茶店稱へて出端くむ青前垂

の入端は。女房盛りの器量よし。五つか六つの男の子。傍に付添ひ母様と。ンシ

いう出端香もさめにけれ。枯れ残る。ハルシ身はいと猶。枝をりや。若葉の内侍若君は。主馬の小金吾武里が。暖帳を

通れて維盛の。もしや高野と心ざし

旅の用意の小風呂敷。脊に忍海吉野

なるンシ

に着きけるが。若君六代

下市。村

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代

に着きけるが。若君六代



尾上菊五郎
若井冬三郎

フシ愛想こぼれて差出す。内侍つく

く見給ひ。コリヤ此方も子持よの。

自も連合の忘れ形見を伴ひしに。道よ

りなやみて貯へし。薬を残らず飲みきら

し俄の雛儀。子持つた者は相見互。嗜み

あらば所望したしと仰に女房。則それは

マア甚い御難儀。私が子は生れてより腹痛一つ起しませぬ。何の用意もござりませぬ。ハテそれは氣の毒や。イヤ申しほんにそれ／＼。幸ひ此村の寺の門前に洞呂川の陀羅助を。誂賣る人がござりますれば。お供の前髪様つい一走り。イヤイヤ身どもは當所不案内。大儀ながら其方調べてくれまいか。ヲ、それもお安い事。わたしが調べて来て上げませう。善太留守しや。但しは行くか。おれもと暮ふ子を連れて。器量よければ心まで尊い寺の門前へフシ薬を買ひに急ぎ行く。地ハテ心よい女中やと内侍は見やり。コレ六代爰に大分木の實があるが。拾うて遊ぶ氣はないか。金吾が拾ふが大事ないかと。男めの詞に引立てられ。おれも拾ふと若君の病もわやく半分の。起立ち給へば内侍も共々。サア／＼拾を。同イヤ拙者めがと小金吾が。地二十歳に近い大

前髪大人氣ないも若君の。機嫌取り腰柄の實を。フシ拾ひ集むる折柄に。地若き男の草臥足。小オクリ是も。旗立ち風呂敷包。脊負うてぶら／＼茶店を見付け。どりや休んで一服と包をどつかり床几に下し。御免なりませ火を一つと煙草吸ひつけ。同コリヤ皆様方は開帳参りてござりますか。和子様は道草か。わしらが在所の子供と違ひ。御奇麗な生れつきやと。地警めても咄しかけても。心置く身はそこ／＼に。フシ詞數なく拾ひ居る。地暫く休んでかの男。同コレ／＼其落ちた木の實は虫入りで。見かけがようでも皆空虚。木にあるをお取りなされと。いふに金吾は。こな男何をいふ。二丈餘りの高木。駆上る蹴爪は持たぬ。サそれを心安う取りやうがござります。そりやどうして。さらば鍛錬お目にかけうと。小石拾うて打つ礫。枝に當つてばら／＼。若

君悦び腦も忘れ。小金吾拾への御機嫌に内侍も嬉しく。同ヲ、よい事して貰やつた。地過分々々と一體も。冥加に餘ると知らざりし。旅の男は自慢顔。同何と手の内御覽じたか。まそつと打つて進ぜたいが。遠道か／＼お伽申しても居られず。地我等は參ると包を脊負ひ。御縁あらは重ねてと。フシいうて其場を行き過ぐる。地小金吾木の實を拾ひ了ひ。同サア是で堪忍なされ。扱々今の男は氣轉者と。地見やる床几の風呂敷包。同し色でもどこやらが違つた様など走り寄り。内改むれば覺えなきしかも是は張皮籠。こちは衣類の藤行李。扱は木の實に氣を奪はせ。取換へうせたか但しは魚相か。何にもせよ追つかけて取返さんと駆出す所へ。向うよりあたふた戻る以前の男。魚相致した御免々々といひつゝ包を差出し。同日暮も近し心はせく。同し色の風呂敷ゆる。

重い輕いにもつかず取りちがへた鹿相。道にてふつと心付き取つてかへしてお詫言。眞平御免下されと。顔に似合はぬッ手すりたいたいぼう。小金吾は胸落着き。麴鹿相とあれば言分もをりないが。萬一紛失の物あると赦さぬが合點か。何が扱相違あらば臺座の別れ。御存分になされませ。ムウ其一言なら疑ふに及ばねども。地中改めて請取らんと包を開き。改め見れば相違もなし。眞實に鹿相に極つた。申分なし其方の。荷物も持つてお行きやれと。地床几に残る風呂敷包。渡せば請取り不思議顔。此中括の解けたは。イヤそれは最前變つた様には思へども。もしやとちよつと見たばかりと。地いふ間に開く張皮籠。引散らけて袷の袖。浴衣の間を探し見て。びつくり仰天行李打ちふるひ。コリヤどうちやコリヤ無いわ。無いわ〜ときよろ〜目玉。何がない

何見えぬと。傍も氣の毒目をくればば。豫てたくみのいがみ男。腕まくりしてコレ前髪殿。此皮籠の中に人に頼まれて高野へ上げる祠堂金。二十兩入れ置いた。コリヤくすねたなく。サア出した〜〜。サ出しやいのと。地取つてもつかぬ難題に。小金吾むつと反打ちかけ。此下郎め武士に向つて何がなんと。今一言いうて見よと。氣相變れどびくともせず。盜人たけ〜しいと。その高ゆすりくはぬ〜。赤鬚をひねりかけ威嚇して此場をぬげるのか。ほろうまいそんな事春永になされ。僅か二十兩で首綱のからぬ中。四の五のいはずに出した〜と。地もがりがみの強請者。モウ堪忍がと抜きかけしが。お二方の姿を見てじつとこたへて胸撫でおろし。コレサ若い人そりや其許の覺遠ひ。見らる〜通り足弱をお供したれば。たとへ何萬兩落散つて

あつても。目をかける所存はなし。地篤と其方を吟味召されと。いはせも果てず。コレ其足弱連れた。が盜する付目ぢや。よもやと思はせしてやるが當世の流行物。何萬兩は入らぬたつた二十兩。スリヤどろしても身が盗んだとな。ハテ知れた事。ムウして其盗んだ證據は。コレ此皮籠の中紐何故解いた。あり様の荷物に紛失があると赦さぬというたでないか。理詰めぢやぞや。出しやいの〜と。地せり詰められて小金吾も。もう是迄と拔放す。内侍はあわて抱きとめ。同尤ちや道理ぢや。短氣な事をしやつては。わしも此子も共に難儀。無念にあらうと堪忍して。あの者のいふ様に了簡つけてやつても。地足弱連れたを災難と思ひ。胸をしつめてたもいのと。涙にくれて宣ふにぞ。血氣にはやる小金吾も見らるに忍びず。世が世の時でござらうなら。すた〜に

試しても厭き足らぬ奴なれども。何をいうても茅花の穂にも怯ぢる身の上。御意の通りで致しませよ。へエ、口惜しうござりますると。地こなたは大事の二方を。お供の身なれば無念を堪へ。奥齒嚙む程つきあがり。同二十兩といふ金温まつて置いて。其類何ぢや。ホウ怖いわく。此赤鬚で切るか。此目で嚇すか。前髪を一筋づつ抜くぞよ。但しもう金はふけられたか。地連の女郎から穿鑿と。弱みへかゝるを首筋つかんで引戻し。用意の路金いふ程出して脱みつけ。同大切なお方をお供した故街取らるゝ廿兩。地持つてうせいと打付くれば。街の習ひ金見ると目に佛なく手ばしかく。拾ひ集めて耳よみ揃へ。同テモ恐ろしい此金を那智若衆めにすつての事。地ひじり取らりと致したと減す口。其願をと立寄る金吾を内侍は押へ。事ない中と若君引連れ。立出

で給へば是非もなく跡に引添ひ小金吾も。無念をこたへ上市のフッ宿ある。方へと急ぎ行く。地たとへ百度脱まれても。一度が一歩に付きやせまい。うまい仕事といがみの權太。金懐に押入れて。盆屋へ急ぐ向うへすつと。茶屋の女房が立塞がり。同コレ權太殿。こりや何處へ。ホ小せんか。わりや店明けて何處へいた。わしや旅人のお頼で坂本へ薬を買ひに。が居たら又邪魔しように。外して居たでましましと。地いふ胸ぐらを取つて引する。同コレこなたに街さす氣で外しては居ぬぞや。最前戻りかゝつた所にわつばさつば。差出たら街の正銘顯はれ。どんな事にならうも知れ



ぬと。あの松陰から聞いて居た。へエ、こなたさんは恐しいたくみする人ぢや。妾は生めども心は生まぬと。親御は釣瓶鉾屋の彌助の彌左衛門様というて。此村で口も利くお方。見限られ勘當同然。御所の町に居た時こそ道も隔たれ。跡の月から同じ此下市に住んでも。嫁か孫かとお近付にもならぬはの。皆此方様の心から。いがみの權に衣きせて。街の權といはうぞや。

此善太郎は可愛うないか。博突の資本が入るならば此子やわしを賣つてなりと。重ねて止めて下さんせ。何の因果で其様な恐ろしい氣にならしやつたと。取付き歎けば突飛し。阿ヤ引きさかれめが又しては世迷言。おれが盗街の根元は。皆うぬから起つた事。ホこりや大それた事聞かねばならぬ。そりや又どうして。どうしてとは覺えがあらう。おりや十五の年元服して。親父の言付けで御所の町へ鮮商。隠し女の中に汝が振袖。見込んだが鯨。鱧程寝入る佛師達の。臍くりを盗出し。店の溜り花香先。身代半分了うてやつた。ナ聞えたか。所で親父がほり出した。無理な和郎の。其時因果と此餓鬼が腹にあつて。親方はねだる。年貢米を盗んで立銀。其尻が来て首が飛ぶのを。庄屋の阿呆が年賦にして。毎日の催促。其金濟そで博突にかゝり。出世して小

強請街此中も親父の所家尻を切つて見たれど。妹のお里めと。内の男めと夜通しの鼻聲でとんとまんが損ねた。又今日のまんのよさ此勢に母の鼻毛をゆすりかけ。二三貫目いぢめてくる。酒買うて待つてをれ。善太よ。日の暮から寝をんな。夜通しせねばおれが商賣は譲られぬと。いひつゝ立てば女房取付き。まだ此上に親御の物まで嘸し取るとは勿體ない。マア内へ戻つて下されと。結れど聞かず跳飛すを。コリヤやい善太よ留めてくれと。母の教に利口者父



様内へサアござれと手に纏ひ付く萬萬子、
が跡追へば悪者は。小手縛とてうらたてが
る。しかも血筋の糸繩で。きびたが悪い
出直そと。鬼でも子には引かざる。テ
モ扱も冷たい手ぢやと手を引いて オクリ女
房へ諸共立歸る。ハルラン夕陽西へ入る折
から。主馬の小金吾武里は上市村にて
朝方が。追手の人数に取巻かれ。數ヶ所の
疵を負ひながら内侍若君御供申し。一先
づ都へ立歸るを。跡に續いて數百人。通
さぬやらぬと追つかけたり。手疵は負へ
ども氣は鐵石の武里が。死物狂と思ひの
双の爰に三人彼處に七人はらりくと三重
へ薙倒し、其身は秋の花紅葉敵は木の
葉の其跡へ。追手の大將猪熊大之進後れ
ばせに駈け來り。阿ヤア死損め何處へ
行く。先頃嵯峨の奥にて取逃し。主人朝
方公の御機嫌以外の外。すぐく館へ歸ら
れず。鹿坊主めに白狀させ付廻したる此

街道。サア維盛の御臺若君を渡し。腹腹か
つまばけとッ呼ばはつたり。手負は流
るゝ血汐をぐつと一飲み息をつぎ。主
馬の判官が悴小金吾武里。息ある中はい
つかなく、ヲ其一言が絶命と。躍上つ
て討つ太刀をちやうど請留めはつしと撥
ね。阿ひらりと見せてはゆるりと外し手練
を盡せどさすがは手負。内侍若君あぶ
腰なる加勢も念力。手強く見ゆる猪熊が
眼に入つて目當は暗闇。隙間に切込む太
刀に肩間を割られて。頭轉倒。乗りか
るを下よりも突く。鈍は肋骨。金吾も仰
向に反返る。あなたが起きれば石礫。猪熊
切られ小金吾も。共に深手の四苦八苦ッ
修羅の巻ぞ危けれ。忠義の天性小金吾
が難なく相手を取つて押へ。ぐつと突込
む止めの刀。サア仕了せし嬉しやと。思
ふ心のたるみにや。うんとッ其身も倒

れ伏す。ナウ悲しやと内侍若君勇り抱
へ抱起し。コレなう金吾々々氣をはつ
きりと持つてたも。其方が死んで、自や
此子は何となる物ぞ。情なや悲しやと
泣入り給ふ御聲の。耳に通つて手負は顔
を上げ。コレ内侍様六代様。諦めて下
さりませ。心は彌狂に逸れどももう叶は
ぬ。我が君維盛様は。豫て御出家のお望。
熊野浦にて逢ひ奉りしといふ者ある故。
高野山へと志しお二方をお供したれど。
なかく此傷では一足も行かれず。コレ
若君様。ようお聞き遊ばせや。御臺様を
伴ひ紙谷の宿といふ所に。内侍様を残し。
お前は人を頼んで山へ登り。父様のお名
はいはれぬ。今道心の御出家と尋ねてお
逢ひ遊ばせ。西も東も敵の中。平家の公達
と悟られぬ様。お命目出度う御成人の後。
憚りながら金吾めが事思召し出されな
ば。一滴の水一枝の花。それが即ち冥途

へ御知行。御成長待つてをります。お名
殘惜しいお別れと。いふもせつなき息づ
かひ。六代君は取継り。死んでくれな小
金吾。其方が死ぬると父様に逢ふ事がな
らぬと。地泣入り給へば内侍はせき上
げ。阿レ聞いてたも子心でも。其方一
人を力にする。維盛様に逢ふ迄は。死ぬま
いぞ〜と何故思うてはたもらぬ。地御
一門は残らず亡び廣い世界を敵に持ち。
何時迄存へ居られうぞ。共に殺してフシ
たもいのと歎き。給へば。フシ理と。
地手負はいと涙にくれ。詞先君小松の
重盛様は日本の聖人。若君は其孫君諸神
諸菩薩の。恵のない事もござりますまい。
末頼みを思召して必ず短氣をお出しなさ
れな。あれ〜向うへ挑燈の火影。又も追
手の来るも知れず。若君伴ひ此場を早く
〜。イヤ〜深手の其方を見捨て置い
て。何國を當に行くものぞ。死なば共にと

坐し給へば。詞二、腑甲斐ない六代様は
大事にないか。此傷で死ぬる金吾めでは
ござりませぬ。聞入れなければ直に切腹。
コレ待つてたも。それ程にまで思やるな
ら。成程先へ落ちませう。必ず死んでたも
るなや。お氣遣ひ遊ばすな。運に叶ひ跡
より參ろ。必ず待つて居るぞやと。地言
ふ間も近付く挑燈の。火かけに恐れ是非
なくも若君。フシ連れて落ち給ふ。御心根
の悼はしさ。手負は御跡見送り〜。詞
死なぬと申せしは偽り。三千世界の運借
つても。何の此傷で生きられませう。内
侍様。六代様。これが此世のお別れでこ
ざりますと。地思ふ心も斷末魔。知死
期も六つの暮過ぎてフシ朝の露と消えに
ける。地程なく来る挑燈は此村の五人組。
何やらさわ〜話し合ひ。山坂の別れ途
に庄屋作が立留り。詞コレ彌助の彌左衛
門殿。貴様は鮮商賣故。念押す上におしか

ける。今いひつけた鎌倉の侍は聞及んだ
蛸蛸。何やらこなたの耳を詰つて凡げる
程いひつけたら。畏つた〜と滅多無性
に請合うたが。何と覺のある事かや。ハ
テ知れた事。此方業も常からおれが性根
を知らぬか。血を分けた忤でも見限つた
ら。門端も踏まさぬ彌左衛門。膝ぶしが
碎けても。畏つたら痺も切らさぬ。した
が跡からのいひつけがもつけ。嵯峨の奥
から逃げて来た。子連れた女と大前髪。
此村へ入込んだと追手からの知らせ。所
で蛸殿が甜りかけて。捕へたら褒美とあ
る。こりや又格別よい仕事。地皆も油斷
をせまいぞやヲそれ〜。こんな時こな
たの息子の。いがみの權太を頼んで置か
うと五人組。ハ〜山道行けば。地彌左
衛門坂へおりしも行先の手負にばつたり
行當りはつと飛び退き。氣味悪ながら挑
燈振上げ。そろ〜立寄り。詞テモむごた

らしう切つたはく。旅人さうなが。追判の所爲ならば丸裸にしさうなもの。路銀を當に悪者の所爲かと。悪い子を持つ親の身は。案じ過して。詞コレく手負殿く。呼ぶも答もなき骸に。扱は最早息絶えたか。詞いとしや何國の人なるぞ。見ればふけた角前髪。袖振合も他生の縁。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。鬼角浮世は老少不定。哀れを見るも佛の意見。人は曲まず眞直に後生の種が大事ぞと。フシ思ひ續けて行過ぎしが。何思ひけん立止り。取つつ置いつの俄の思案。そろりと立戻り。見廻しつて。披身を拾ひ取るより早く。死首はつしと打落し。挑燈吹消し首提げ。糸いと彌左衛門。直なる道も横飛に我が家をさして。三更立歸る。二より歌春は來ねども花咲かす。娘が漬けた鮮ならば。なれがよかると。買ひにくる。ナホスハル



フシ風味も吉野。下市に賣弘めたる釣瓶鮮御鮮所の彌左衛門。留守の内にも商賣に抜目も内儀が早漬に。娘お里が片襦。小オクリ襟に。前垂ほやくと愛に愛持つ鮎の鮮。長押へてしめてなれさする。味

い盛りの振袖が。釣瓶鮮とは。フシ物らし。木に栓を打込んで。桶片付けて申し母様。昨日父様のいはしやるには。明日の晚には内の彌助と祝言さす程に。世間晴れて女夫になれと仰しやつたが。

日が暮れてもお歸らないは嘘かいな。アあの言やる事わいの。何の嘘であるぞ。器量のよいを見込みに。熊野参りから連れて戻つて。氣も心も知ると彌助といふ我が名を譲り。主は彌左衛門と改めて内の事任せて置かしやるは。和女と娶はす豫ての心。今日は俄に役所から。親父殿を呼びに来て思はぬ隙入。迎ひに遣るにも人はなし。サイナ折悪う彌助殿も方々から鮓の誂へ。仕込の桶が足るまいと明桶取りにいかれました。桶もう戻らるゝでござんしよと。フシ喰半へ。明桶荷ひ戻る男のとりになりも。利口で伊達で。色も香も知る人ぞ知る優男。娘が好いた厚髪に冠着せてもフシ憎からず。堀内へ入る間も待兼ねて。お里は嬉しく。アレ彌助様の戻らんした。御待兼ねた遅かつた。もしや何處ぞへ寄つてかと。氣が廻つた堀家じたと。女房顔して言うて見る。サリ流



石鮓屋の娘とて。フシ早い馴とぞ見えにける。堀母は完く笑ひを含み。彌助殿氣にかけて下さんな。この吉野窟は辨財天の教によつて。夫を神とも佛とも。戴いで居よとある天女の掬。其代り程悟氣も深い。又有様は親の孫。瓜の莖に堀ではござらぬといひくろむれば。阿是はまあ却つて迷惑。段々お世話の上。大切なお娘御まで下され。お禮の申し様もござりませぬ。さりながら兎角お前には。彌助殿彌

助殿と。殿付をなされてさりとは氣の毒。やつぱり彌助どう爲い斯う爲いとお心安う。ナ申し。イヤ／＼それは赦して下され。そりや又何故でござりますすえ。さればいの。彌助といふ名はこれ迄連合の呼名。殿付せずにとどう爲いかう爲いは。勿辨なうて言憎い。言馴れた通り殿付さして下されと。眞實に夫をば大切に。思ふ掟を幸ひに娘へこれを聞けがしの。フシ母の慈悲とぞ聞えける。おお里彌助は明桶を板間へ並べて居る所へ。此家の惣領いがみの桶太門口より乙聲で。母者人／＼と。いひつゝ入ればお里はびつくり。又兄様かようお出でと揉手する。聞きよと／＼しい其面何ちや。よう来たがびつくりか。わりや彌助と味い事して居るさうなが。コリヤ彌助もよう聞け。今追出されて居ても。竈の下の灰迄おれが物。今日は親父の毛虫が。役所へ往たと

聞いたによつて。ちと母者人にいふ事があつて来た。二人ながら奥へ失せうと彌助。娘も跡に引添うてフシ一間へこそは入りにつれ。彌助に母親溜息つき。コリヤ又留守を考へ無心に來たか。性懲りもない腕白者。其汝が心から嫁子があつても。足踏み一つさす事ならぬ。聞きや此村へ來て居るげなが。互に知らねば摺合うても。嫁姑の明盲目。眼つぶれと人々にいはれるが面目ない。ヘエ、不孝者めと目に角を。立て變つたる機嫌にぐんにやり。直ではいかぬといがみの桶太。思案しかへて。申し母者人。今晚參つたは無心ではござりませぬ。お暇乞に參りました。そりや何で。私は遠い所へ參ります程に。親父様にもお前にも。随分お健で／＼としをれかければ母は驚き。遠い所とはそりや何所へ。どう

した譯で何しに行くと。根間は親の瞞された小口。サアしてやつたと。フシ目をしばた／＼き。親の物は子の物と。お前へこそ無心申せ。竟に人の物箸一本。曲んだ事も致しませぬに。不孝の罰か。夜前私は大盗人に遭ひました。ヒヤア。其中に代官所へ上げる年貢銀。三貫目といふもの盗み取られ。言譯もなく仕様もなく。お處刑にあはうよりはと覺悟極めてをります。情ない目に遭ひましたと。かます袖をば顔に當て。しやくり上げても出ぬ涙。鼻が邪魔して目の縁へとどかぬ舌ぞフシうらめしき。甘い中にも分けて母親。實と思ひ俱に目をすり。鬼神に横道なしと。年貢の銀を盗まれ死なうと覺悟はまだ出かした。災難に遭ふも親の罰よう思ひ知れよ。アイ／＼思ひ知つてはをりますけれど。どうで死なねばなりませんまい。コリヤやい。あい／＼。

常の汝が性根故これも術か知らねども。しやうぶ分にと思つた銀。親父殿に隠してやる。是でほつとり根性直せと。堀そろ／＼戸棚へ子の陰で。親も盗をする母の甘い錠さへ明け兼ねる。詞つゝ雁首でこち／＼が堀よござりますると仕馴れたるおのが手技を教ゆる不孝。親は我が子が可愛さに地獄の種の三貫目。跡をくろめて持つて出で。何ぞに包んで遣りたいかと。限りない程甘い親。味いわるちやといがみの權太鮮の明桶よい入れ物。是へ。／＼と親子して銀を漬けたる金鉢。蓋しめ栓しめサアよいわ。これで目立たぬ提げて去ぬと親子が工合の最中へ。苦い爺親彌左衛門これも疵持つ足の裏。あたふたとして門口を。戻つた明けいと打叩く。南無三親父と内に轉倒狼狽へ廻り其桶を。爰へ／＼と明桶と共に並べて親子はひそ／＼。奥と口とへ引別れ。息を

結めてぞ、ッッ入りにける。なぜ明けぬ／＼と。頻に叩けば奥より彌助。ヘスミッシ走り出でて戸を明ける。堀内入り悪く傍を見廻し。詞コリヤ又何奴も寝てをるか。いひつけた鮮共は。堀仕込んであるかと鮮桶を提げたり明けたりぐわつた／＼。詞コリヤ思ふ程仕事が出来ぬ。女房どもやお里めは何してをるぞ。イヤ只今奥へ呼びましょと行く彌助をば引き止め。内外見廻し表をしめ。上座へ直し。ッッ手をつかへ。詞君の親御。小松の内府重盛公の御恩を請けたる某。何卒御子維盛卿の御行方をと。思ふ折柄熊野浦にて出合ひ。御代をすゝめ此家へお供申したれども。人目を憚り下部の奉公。餘りと申せば勿體なさ。女房ばかりに仔細を語り今宵祝言と申すも。心は娘を御宮仕へ。彌助々々と。賤しき我が名をお譲り申したも。彌助くるといふ文字の縁起。人は

知らじと存ぜしに。今日鎌倉より。堀原平三景時來つて。維盛卿をかまくまへあると退引させぬ詮議。烏を驚と云ひ抜けては歸れども。邪智深い梶原。もしや吟味に參ろも知れずと。心工は致して置けども油断は怪我の基。明日からでも我が隣居上市村へお越しあれと。堀申上ぐれば維盛卿。詞父重盛の厚恩を請けたる者は幾萬人。數限りなき其中に。お事が様な者あらうか。堀昔はいかなる者なるぞと。ッッ尋ね給へば。詞私めは平家御代盛りの折柄。唐土育王山へ。祠堂金お渡しなさるゝ時普戸の瀬戸にて三千兩の金盜取られ。役目の難儀切腹にも及ばん所。有難いは重盛様。日本の金唐土へ渡す我こそは。日本の本盗賊と御身の上を悔み給ひ。重ねて何の祟もなく御暇を下され。親里へ立歸つて由緒ある鮮商賣。今日を安業にくらせども。伴權太郎が盜術。殺

生の報ぞと。思ひ知つたる身の懺悔。

お恥しうござりますと。語るにつけて維

盛も。器具榮華の昔父の事思ひ出され御

膝に。スエ落つる涙ぞいたはしき。娘

お里は今宵待つ月の柱の殿設け。寐道具

抱へ立出づれば。主ははつと泣目を隠し。

詞コリヤ彌助。今いひ聞かした通り。上

市村へ行く事を必ずく忘れまいぞ。今

宵はお里と爰にゆるり。嫌と俺とは離

座敷遠いが花の。詞香がなうて。氣樂に

あらうと打笑ひ。ヘルン奥へ行くのも娘は

嬉しく。テモ粹な父さん離座敷は隣知ら

ず。餅つきせうとヲをかし。こちらは爰に

天井抜け。寢て花やろとフシ蒲團敷く。

維盛卿はつくぐと身の上又は都の

空。若葉の内侍や若君の事のみ思ひ出さ

れて。スエテ心も濟ます氣も浮かず。フシ打

ちしをれ給ひしを。思はせぶりとお里

は立寄り。詞コレサこれなア。ヲしんき。

何初心な案じてぞ。二世も三世も固め

の枕。詞二つ並べた此方や寐よと。先

へころりと轉寐は。フシ戀の良とぞ見え

にけり。維盛枕に寄添ひ給ひ。詞是迄こ

そ假の情夫婦となれば二世の縁。結ぶ

につらき一つの言譯。詞何を隠さう某は。

國に残せし妻子あり。貞女兩夫に見えず

の扱は夫も同じ事。二世の固めは赦し

てと。流石小松の嫡子とて解けたやうで

も何處やらにフシ親御の氣風残りける。

神ならず佛ならねばそれとも。知ら

ぬ道をば行迷ふ。若葉の内侍は若君を宿

ある方に預け置き。手負の事も頼まんと

思ひ寄る身も縁のはし。此家を見かけ

ハゲシ戸を打叩き。詞一夜の宿と乞ひ給

へば。維盛はよい退きしほと表の方。

叩く極に膚を寄せ。詞此内は鮮商賣。宿

屋ではござらぬと。愛想のないがフシ愛

想となり。詞イヤこれ申し。稚を連れた

旅の女。スエ是非に一夜と宜ふにぞ。斷

いうて歸さんと。戸を押開き月影に。

見れば内侍と六代君。はつと戸をさし内

の様子。娘の手前もいぶかしくそろく

立寄り見給へば。フシ早くも結ぶ夢の體。

表に内侍は不思議の思ひ。詞今のはど

うやら我が夫に。似たと思へど形容の頭

も背き下男よもやと思ひ給ふ中。戸を押

開いて維盛卿。詞若葉の内侍か。六代か

と。宜ふ聲にヒヤア扱は我が夫。父様

か。ナウなつかしやと取纏り。詞はなく

て三人は。フシ泣くより外の事ぞなき。

先づく内へと密に伴ひ。詞今宵は取

分け都の事。思ひ暮して居たりしが。親

子共に息災で不思議の對面さりながら。

某此家に居る事を誰が知らせしぞ。殊に

又。遙々の旅の空供連れぬも心得ずと。

尋ね給へば若葉の君。都でお別れ申して

より須磨や八島の軍を案じ。一門残らず

討死と聞く。悲しさも嵯峨の奥。泣いてば
つかり暮せしに。高野とやらんにおはす
るといふ者のある故に。小金吾召連れお
行方を心ざす道追手に出合ひ。可愛や金
吾は深手の別れ頼みも力もない中に。廻
り逢うたは嬉しいが。三位中将維盛様が。
このお姿は何事ぞ。袖の無い此羽織に。
このお頭はと、フシ取付いて咽び。総入り
給ふにぞ。地面なさに維盛も。額に手を
當て袖を當て、フシ伏し。沈みてぞおはし
ます。地涙の内にも若葉の君臥したる娘
に目をつけ給ひ。詞若い女中の寢入はな。
殊に枕も二つあり。定めてお伽の人なら
ん。地斯くゆるかしきお暮しなら都の事
も思召し。風の便もあるべきに。打捨て
給ふは洞窓と恨み給へば。詞ホヲ、それ
も心にかゝりしかど。文の落ち散る恐れ
あり。わけて此家の彌左衛門。文重盛へ
の恩報じと。我を助けて是迄に。重々厚

き夫婦が情。何がな一禮返禮と。思ふ折
柄娘の戀路。つれなくはいは過あらん。却
つて恩が仇なりと假の契は結べども。女
は嫉妬に大事も漏すと。彌左衛門にも口
留して我が身の上を明さず。地仇な枕も
親どもへ義理に是迄契りしと。地語り給
へば臥したる娘。堪へ兼ねしか聲上げて
わつとばかりに泣出す。コハ何故と驚く
内侍若君引連れ逃げのかんとし給へば
詞ナウこれお待ち下されと。地涙と共に
お里は駈け寄り。先づこれへと内侍
若君上座へ直し。詞私はお里と申して此
家の娘。淫者憎い奴と。思召されん申
譯。地過ぎつる春の頃色めづらしい草中
へ。繪にあるやうな殿御のお出で。維盛
様とは露しらす女の淺い心から。可愛ら
しいいとらししいと思ひそめたが戀のも
と。詞父も聞えず。母様も。地夢にも知
らして下さつたら。サハハ縦へ焦れて死ぬ

ればとて。雲井に近き御方へ鉾屋の娘が
惚れられうか。一生連添ふ殿御ぢやと。
思ひ込んで居るものを。二世の固めは叶
はぬ。親への義理に契つたとは。情ない
お情に。預りましたとどうど伏し、フシ身
をふるはして泣きければ。地維盛卿は氣
の毒の。内侍も道理の詫涙。フシかはく
間もなき折柄に。地村の役人駈來り戸を
叩いて。詞コレへ爰へ梶原様が見えま
する。地内掃除しておかれいと言捨てて
立歸る。人々はつと泣く目も晴れ。エエ
如何は。せんと俄の仰天。お里は早速に心
付き。詞先づ親の隠居屋敷。地フシ上市
村へと氣をあせる。詞實に其事は彌左衛
門我にも教へ置きしかど。最早開かぬ平
家の運命。地檢使を引請け潔う腹かき切
らんと身拵へ内侍は悲しく。コレ此若の
いたいけ盛を思召し。一先づ爰をと無理
ヤに引立て給へば維盛も。子に引かさ

る。後髮うしろかみ。是非なく其場を落ち給ふ。フシ御運の程ぞ危けれ。様子を聞いたかいがみの權太勝手口より躍出で。御お觸ふのあつた内侍六代。維盛彌助ハズミンシせしめてくれんと尻引塞げ駈出すを。コレ待つてとお里は取付き。兄様これは一生の妾めかけが願ひ。見赦して下されと。

頼めど聞かず跳はな飛とばし。大金になる大仕事邪魔ひろぐなと縋すがるを蹴倒し撲む飛とばし。最前置きし銀の鉢はち桶づ。これ忘れてはと提ひげてフシ跡を慕ねがうて追うて行く。阿ナウ父様母様と。おお里が呼ぶ聲彌左衛門。母も駈出で何事と問へば娘はコレく。阿都から維盛様の御寒ごん若君尋ねさまよひお出であり。積つる話の其中へ詮議に来ると知らせを聞き。三人連で上市へ落おしましたを情ない。兄様が聞いて居て討取るか生捕なまつて。褒美ほうびにするとなつた今追いま駈かけてと。地いふよりびつくり彌左

衛門。ソレ一大事と噂うわさの朱鞘しゆせうの脇差腰にばつこみ駈出す向うへ。ハイく々と。矢筈やはずの挑燈てんとう提原平三景時。家來數多に十手持たせ道を塞いで。阿ヤア老運おきなめ何處どこへ行く。逃にげるとと、逃にげがさうかと。

追取りまかれてはつと吐胸とけむら。先も氣遣ひ。爰も通とれず七轉しちてん八倒はつたう心は早鐘はやかね。フシ時に時撞ときつく如くなり。阿ヤア此奴こいつ横道者よこみちもの。汝おれに今日維盛が事詮議すれば。存ぞんぜぬ知らぬといひぬける。其儘ままにして歸せしは。思おもひ寄らず踏ふ込まう爲。此家に維盛がくまひある事。所の者より地頭へ訴へ。早速鎌倉へ早打はやうち取る物も取りあへず來れども。油斷あぶらの體ていは汝を取逃とすまい爲。サア首討くびつて渡すか。但し違背ちがひに及ぶか。返答こたへせいと責付けられ。地叶あははぬ所と胸をする。阿成程一旦は匿かくひ無ないとは申したれども。餘り御詮議強こき故隠かくしても隠されず。はや先達さきだちて首討くびつたり。御覺おぼえに

入れんお通りと伴ひ入れれば母娘。どうなる事と氣遣きぢふ中。鉢桶はちづ提げ彌左衛門しづしづ出でて向うに直し。阿三位維盛の首。御受取おんうけ下されよと。蓋かきを取らんとする所を。女房駈寄にようかりちやつと押へ。阿コレ親父殿。此桶かづの内には妾めかけが些ちと大事の物を入れて置いた。此方こなたさん明けてどうするぞ。ホ汝おれは知るまい此桶かづには。最前維盛卿のお首くびを討とつて入れ置いた。イヤくく此桶かづには此方こなたに見せぬ物がある

と。引寄ひすれば引戻ひし。阿汝おれが何にも知らぬ故。イヤ此方こなたが知らぬ故と。地妻は銀と心得てフシ争まひ果はてねば。提原平三。阿提あ提あは此奴こいつ等言ことひ合せ。地縛くわれくれと下知したの。捕とつたくとフシ取りまく所に。阿維盛夫婦いせいふと餓鬼がき奴やつまで。いがみの權太が生捕なまつたり討取とつたりと呼はる聲。地はつとばかりに彌左衛門女房娘も氣は狂亂。いがみの權太は敵ためしく

若君内侍を猿縛り。宙に引立て目通りに
どつかと引つす。親父の賣僧が。三
位維盛を熊野浦より連れ歸り。道にて頭
を刺りこぼち。青二才にして彌助と名を
變へ。此間はほてくろしき聲詮聖。生捕
つて頬恥と存じたに。思ひの外手強い奴。
村の者の手をつてやうくと討取り。

首に致して持參御實檢と差出す。ヲ、成
程。刺りこぼち彌助といふとは存じなが
ら。先達ていはぬは彌左衛門めに。思ひ
違ひを爲さう爲。聞及んだいがみの權太。
悪者と聞いたがお上へ對しては忠義の
者。出来いたく内侍六代生捕つたな。
ハテよい器量。夢野の鹿で思はずも。

女鹿子鹿の手に入るはあつばれの働き。
彌左衛門には親の彌左衛門めが命赦してく
れう。イヤく申し。親の命ぐらゐを赦
して貰をと思つて。此働は致しませぬ。
スリヤ親の命は取られても褒美が欲しい

か。ハテあの和郎の命はあの和郎と相對。
私には鬼角お銀と願へば梶原。ハテ小
氣味のよい奴。褒美くれんと着せし羽
織。説いで渡せば柳頂爛。ココリヤく。
其羽織は頼朝公のお召様。何時でも鎌倉
へ持來らば金銀と釣換。囃託の合紋と
聞くより戴き出來たく。當世街が流
行によつて。二重取をさせぬ分別。よう
したものと引換に。繩付渡せば請取つて
フシ首を器に納めさせ。ココリヤ權太。

彌左衛門一家の奴等暫く汝に預くる。お
氣遣ひなされますな。貧乏ゆるぎもさせ
ませぬ。ハテ扱健氣な男めと。譽めそ
やして梶原平三オトリ繩付。フシへ引立て
立歸る。ア、これく其序に褒美の銀
忘れまいぞと見送る隙間。油斷見合せ
彌左衛門。憎さも憎しと引抱へぐつと突
込む恨の奴。うんと仰向に反りかへる。
見るに親子はハアはつと。憎いながらも

傍らに手負の死人。よい身代りと首討つ

悲しさの。母は思はず駈寄つて。天命
知れや不孝の罪思ひ知れやといひなが
ら。先立つものは涙にて伏沈み。スエテ
ぞ。泣き居たる。彌左衛門齒嚙をなし。
泣く女房。何伏える。不便なの可愛の
というて。こんな奴を生け置くは世界の
人の大きな難儀ぢやわい。門端も踏ます
なといひつけ置いたに内へ引入れ。大事

の大事の維盛様を殺し。内侍様や若君を
よう鎌倉へ渡したな。腹が立つてく涙
がこぼれて胸が裂くるわい。三千世界
に子を殺す。親といふのはおればかり。
連れ手柄な因果者に。よう仕をつたと抜
身の柄。碎くるばかりに握り詰め。刺り
かけるも心は涙。いがみにいがみし權太
郎又物押へて。コレ親父殿。何ぢやれ。

こなたの力で維盛を助ける事は。叶はぬ
く。コリヤいふな。今日幸ひと別れ道の
傍らに手負の死人。よい身代りと首討つ

て戻り此中に隠し置く。堀コリヤこれを
見をれと鮮桶取つて打明ければ。ぐわら
りと出でたる三貫目。詞ヒヤアこりや銀
ぢや。こりやどうぢやと。堀コリヤ。果て
たるばかりなり。ハルン手負は顔を。打
眺め。詞おいとしや親父様。私が性根が
悪るさに。御相談の相手もなく。前髪のお
を總髪にして渡さうとは。了簡違ひのあ
ぶない所。梶原程の侍が。彌助というて
青二才の男に仕立てある事を。知らないで
討手に來ませうか。それといはぬは彼方
もたくみ維盛様御夫婦の。路銀にせんと
盗んだ銀。重いを證據に取違へた鮮桶。
明けて見たれば中には首。はつと思へど
これ幸ひ。月代剃つて突きつけたは。や
つぱりお前の仕込みの首。ムウ其又根性
で。御臺若君に繩をかけ。何故鎌倉へ渡し
たぞ。ホそのお二人と見えたるは。この
權太郎が女房倅。ヤアして。維盛様御

夫婦若君は何處に。ヲ、違はせませうと
袖より出す一文笛。吹立つれば。折よ
しと維盛卿内侍は茶波の姿となり。若君
連れて駈着け給ひ。詞彌左衛門夫婦の業。
權太郎へ一禮を。堀ヤア働を負うたかと
驚くも。お變りないかとびつくりも。エ
一度に。興をぞさましける。堀母は悲しさ
手負に取付き。か程正しき性根にて人に
疎まれ觀らるゝ。身持はなぜにしてくれ
た。常が常なら連合がむざと手疵も負せ
まい。むごい事をとせき上げて悔み敷け
ば權太郎。詞ヤレ其お悔み無用々々。常
が常なら梶原が。身代り喰うては歸りま
せぬ。まだそれさへも疑うて。親の命を
褒美にくれろ。忝いといふと早や。詮議に
詮議をかける所存。いがみと見た故油斷
して。一ぱい喰うて歸りしは。堀禍も三
年と悪い性根の年の明時。生れついで諸
勝負に魂奪はれ。今日も彼方を二十兩。

詞騙取つたる荷物の内に。恭しき高位の
繪姿。彌助が顔に生寫し。合點がいかぬ
と母人へ。銀の無心を困へ入込み。忍ん
で聞けば維盛卿御身に迫る難儀の段々。
堀此度性根改めずば何時親人の御機嫌に。
預る時節もあるまいと折つて代へたる惡
事の裏。維盛様の首はあつても。内侍若
君の代りに立つる人もなく。途方にくれ
し折からに。詞女房小せんが倅を連れ。
親御の勤當古主へ忠義。何狼狽へる事が
ある。私と善太をコレかうと。堀手を廻す
れば倅めも。母様と一所にと共に廻して
縛り繩。かけても。手が外れ。結んだ
細もしやらほどけ。いがんだおれが直な
子を。持つたは何の因果ぢやと。思うて
は泣き。しめては泣き。後手にした其時
の。心は鬼でも蛇心でも。こたへ兼ねた
る血の涙可愛や不便や女房も。わつと一
聲其時に血を吐きましたと語るにぞ。力

み返つて彌左衛門。詞聞えぬぞい權太郎。

孫めに繩をかける時。血を吐く程の悲しさを。常に持つてはなぞくれぬ。廣い世界に嫁一人。孫といふのも彼奴一人。詞

子供大勢遊んで居れば。親の顔を目印に。

苦味のはしつた子があるかと。尋ねて見

てはコレ／＼子供衆。權太が息子は居ま

せぬかと。問へど子供はどの權太。家名

は何とと尋ねられ。おれが口からまんざ

らに。いがみの權太とはえ言はず。悪

者の子ぢや故に。はね出されてをるであ

ろと思ふ程猶そちが憎さ。今直る根性が

半年前に直つたら。詞ナウ婆。親父殿。

嫁や。孫の顔見覺えて置かうのに。

ヲ、く／＼おれもそればつかりと咽せ

返りわつとばかり。フシ伏し沈む心ぞ。思

ひやられたり。地内侍は始終終涙。維盛卿

は身にせまる。いとと思ひにかきくれ給

ひ。詞彌左衛門が歎きさる事なれども。

逢うて別れ。逢はで死ぬるも皆因縁。汝が

討つて歸りたる首は主馬の小金吾とて。

内侍が供せし譜代の家來。生きて盡せ

し忠義は薄く。死して身代る忠勤厚し。

これも不思議の因縁と語り給へば。詞テ

モ扱もそんなら是も鎌倉の。追手の奴等

が皆所爲。ヲ、いふにや及ぶ。右大將頼

朝が。威勢にはびこる無得心。一太刀

恨みぬ残念と。エ怒に交る御涙。實に

お道理と彌左衛門。梶原が預けたる陣羽

織を取出し。詞これは頼朝が着替とて。

褒美の合紋に残し置きし。すだ／＼に引

裂いても。御一門の數には足らねど。一

裂づつの御手向。詞サア遊ばせと差出す。

詞なに頼朝が着替とや。晋の豫讓が例を

引き。衣を刺いて一門の。恨を晴さん思

ひ知れと。詞御佩刀に手をかけて羽織を

取つて引上げ給へば。裏に模様か歌の下

の句。詞内や床しき。内ぞ床しきと。二

つならべて苦いたるは。アラ心得ず。此

歌は小町が詠歌。雲の上はありし昔にか

はらねど。見し玉簾の内や床しきとあり

けるを。その返しとて人も知つたる此歌

を。物々しう書いたは不思議。殊に梶原

は和歌に心を寄せし武士。内や床しきは

此羽織の。縫目の内ぞ床しきと。襟際

附際切りほどき。見れば内には袷袢衣。

珠數まで添へて入れ置いたは。詞コリヤ

どうぢや。詞コハいかにと呆れる人々維

盛卿。詞ホウさもさうずさもあらん。保元

平治の其昔。我が父小松の重盛池の禰尼

と言合せ。死罪に極まる頼朝を命助けて

伊東へ流人。其恩報じに維盛を。助けて

出家させよとの。鷗鷺返しか思返ししか。ハ

ア、敵ながらも頼朝はあつばれの大將。

見し玉簾の内よりも心の内の床しやと。

衣を取つて是とも父重盛の御蔭とッシ

戴き給ふぞ道理なる。詞人々はつと悦び

涙。手負の權太道出で指寄り。及ばぬ
智恵で梶原を謀つたと思ふたが。あつ
ちが何にも皆合點。思へば是迄街つた
も。後は命を街らるゝ種と知らざる。
フシ浅ましと。悔みに近き終り際。維盛
卿も是迄は佛を街つて輪廻を離れず。離
るゝ時は今此時と誓ふつと切り給へ
は。内侍若君お里は緋り共に尼とも姿を
かへ。官仕を救してと願へど叶はず打拂
ひく。内侍は高尾の文覺へ六代が事
頼まれよ。お里は兄に成り代り親へ孝
行肝要と。立出で給へば彌左衛門。女
中の供は年寄の。役と諸共旅用意。手
負をいたはる母親が。ナウこれつれな
い親父殿權太郎が最期も近し。死目に
逢うて下されと。留むるにせき上げ彌左
衛門。現在血を分けた俵を手につけ。
どう死目に逢はれうぞ。死んだを見ては
一足も歩かるゝものかいの。息ある内は

叶はぬ迄も助かる事もあらうかと。思
ふがせめての力草。留める和女が惘怒と
いうて泣出す父親に母は取分け娘は猶。
不便々々と維盛の。首には輪裂装手に衣。
手向の文も阿振多羅三藐三菩提の門出。
高尾高野へ引分くる。夫婦の別れに親子
の名残。手負は見送る顔と顔。思ひはい
づれ大和路や。芳野に残る名物に維盛彌
助といふ鮮屋。今に榮ふる花の里其名も。
高くあらはせり

第四 道行初音の旅

戀と。忠義はいづれが重い。かけてナホス
思ひはフシはかりなや。忠と信の武士に。
スエ君が情と預けられ。靜に忍ぶ都をば。
後に見捨てて旅立ちて。作らぬ形も義經
の御行末は難波津の。波にゆられて。フシ
漂ひて。今は芳野と人傳の噂を道の葉に
て。フシオカリ大和路 ユリオカリへさして墓

ひ。行く野路もハルフシ馴れぬ案の。まが
ひ道も左手も右手も若草を。分けつゝ行け
ば。あさる雉子のバツト立つてはほろゝ
けんくほろゝうつ。汝は子ゆゑに身を
焦す我は。戀路に。迷ふ身のア、うらや
ましフシ妬ましや。キ初雁がねの女
夫つれ。夫持顔の羽ばかま。フシ人より
ましの眞榮ます。稻倉魂の御社は。いと
拿くも。神々と霞の中にみかの原わきて
形見の鼓のかは。くく。の睦言を
人にはつゝむ袂紗物。オシそれを便につ
く杖も心。小オカリ細野を打過ぎて。見渡
せば。四方の梢もほころびて。梅が枝うた
ふ歌姫の里の男が聲々に。三ドリも我が妻
が。合天井けてするる膳。晝の枕はつ
がもなや。合天井けてするる膳。ひる
の枕はつがもなや。ナホスフシヲ、つがもな
や。ハルツシをかし鳥の一節に。人も薬屋
の育にも。春は羽子つく。手鞠一二つ

づくとナホス聞けば。東風風音添へて去年の氷を。眞徳若に御萬歳と君も榮えまします。合ありけう有りや頼もしや。ナホスさぞな大和の人ならば。フシ御隠。家をいざ問はんハハラシ我も初音の。この鼓君の榮を露きて。昔を今になすよしもがな。三ツ下谷の駕ナ。中ギン初音の鼓。調べあやなす音に連れて。つれてまねくさ。合遅ればせなる忠信が旅姿。合背に風呂敷をしかと背挽負うて。野道畔道ゆらり。合。合軽いナホスフシとなりなりいそくと。地目立たぬやうに道隔て。女中の足と侮つて。詞應お待兼ね。羨幸ひの人目なしと。地姓名添へて賜りし。スエ御着長を取出し君と。フシ撒ひ奉る。静は鼓を御顔とよそへて上におきの石。長瀬人こそ知らね西國へ御下向の御海上。波風荒く御船を。其住吉浦に吹上げられ。それより芳野にまします由。二人やがてぞ

参り候はんと互に形見をナホスフシ取納め。合能登守教經と名乗りもあへずよつびい掛けにこの鎧を賜りしも。兄繼信がフシ忠勤なり。八島の戦ひ我が君の。御馬の胸板にたまりもあへず眞逆様。二人あへ



矢面に駒をかけす立塞がる。ヲ、聞き及ぶ其時に。合平家の方には名高き強弓。思出づるも涙にて袖は乾かぬ筒井筒。なき最期は武士の忠臣義死の名を残す。

ハルシいつか御身も。のびやかに春の柳生の糸長く。枝を連ぬる御契などはくちしかるべきと互に。諫め諫められ急ぐとすれど捗らぬ。藤原峠かうの里。土田六田も遠からぬ野路の。春風吹き拂ひ雲と。見まがふ三芳野の窟の。里にぞ

へ着きにける

眞丈六忿怒の御像も花に和らぐ吉野山。軒は霞に埋れて。殊勝さ勝る蔵王堂。櫻はまだし枝々の梢淋しき初春の空。一山の衆徒。評定始と知行下の百姓等。お髭の擧取はき掃除密験あらたな佛より。衆徒の罰をや恐れけん。眞名ばかりはハシ静といへど。急ぐ道。忠信が介抱にて義經の御跡を。長やうく爰に暮ひ来て彌生なかばといひながら。見渡す景もシ吉野山。百姓ども口々に。何と美しい京女蒔。花見にはまだ早いア。何の花見であろぞい。男と女子と二人づれ。

腹がはらみでせう事なう。ついとしてござつたかと問ひかけられてア、いやそんな者でなし。河連法眼殿へ用事あつて参る者。是からどういきますと。皆まで聞かず早合點。詞エ、こんだく。妾奉公にやらしやるの。ヲ往かしやればよい仕合せ。河連法眼様といふはこの一山の衆徒頭。芳野中は立てうと伏せうと儂な上に。女房持つて魚や鳥は喰ひ次第。自墮落坊主の様なれど。妻帯といへば格が重い。どうぞ首尾して仕合さしやれ。アこな様は目高ちやの。が其法眼様には大切なお客でもござりますか。イヤそんな事は知りませぬ。毎日翠三味線で賑かなとは聞きました。コレ此道をかう往てこつちやの方が守明神。女子の参らにやならぬ所。それより手前の一筋道左の方につい見える。大きな門のある所と。教に静があい／＼。忝うござんすと氣

のせく道をとつかはと打連れてへこそ急ぎ行く。ハルシ早や参會と喚び鐘に。山科の法橋坊。無道不敵の一字を蒙り。荒法橋と名を呼ばれ。のつか／＼と来る跡に。鬼と名乗るは遠はぬ悪者梅本の東佐渡坊返り坂の藥師坊。フシ清僧ながら大太刀佩き。大口の裾踏みちらし。道も今日の評定眞先かけ。ない智恵ふるはんナホスフシ面付なり。今迄のふずな百姓ども逆様に遣ひかどめば。鬼佐渡傍を脱み廻し。評定掃除了はぬな。先達いひ渡すにのらかはいて隙入れる。年貢時分に待つてをろと。呵付けられハイ／＼。當眼に手ん手に箒どつさくさ。風上から掃き廻せば袈裟も衣も土埃。獄道めらこりや何しをると。呵る程猶遠慮なう。掃除しますと無二無三ッシ埃かづけて逃げ歸る。妾に河連法眼とて一山の檢校職。華美を好まぬ萌黄の法服。裾

地を着たる指貫もしめくゝりある仁體。

ホ、ウ、コいづれも早かりつと。無五に前後の挨拶あり。各々圓座にッ列れり。

地やあつて河連法眼。詞先達て回狀を

以て申せし所。早々の參會近頃祝着。今日

の談合餘の義にあらすと。無懷中より

一通を取出し。詞鎌倉殿の家臣。我が小

舅茨左衛門より斯の如き書狀到來。文言

を讀み聞かざば申さずとも様子は明白。

先づ聞かれよと押廣げ。飛札を以て申し

達す。九郎判官義經の事弟の身として。舍

尊を討取り都を立退き。大和路に徘徊の

由。其聞えあるによつて。鎌倉殿御憤り大

方ならず。早く討つて出すべきの旨。國々

へ配符を廻らし畢んぬ。討取つて恩賞申

し請け奉らるべく候。隠し置くに於ては

一山の滅亡此時に候也。正月十三日河連

法眼殿。茨左衛門判。聞かれたかいづれ

も。談合とは此事。元來科なき判官殿。

大和路に徘徊とあれば。一山の業徒を頼

め來られんは必定なり。其時は方々頼ま

れ申して匿ふ氣か。又は討つて出す所存

か。心々で濟まぬ事。銘々に遠慮なく評

議あれと。聞聞きもあへず荒法橋。詞實

に尤もさりながら。我々が評定お尋ね迄

なく。一山の仕置頭。法眼殿から了簡を定

め申さるれば。誰あつて詞を背かず一統

せん。先づ御所存はと問返す。ホ、ウ了簡

は胸にあり。まつ斯々といひ聞かざば。

縦へ心に合はずとも。よもやいやとは申

されまじ。さあれば却つて不覺の基。我

が所存は跡でいはん先づ各々の思ふ所。

眞直に申されよと。いへども互に心置

きッ暫し返答意りしが。無返り坂の藥

階坊遠慮なくぬつと出で。詞先づ愚僧が

存するは。義經を匿ふは二年三年。乃至

十年二十年。其間立て呑ひ。一人ばかり

は僅でも辨慶といふ喰抜けの候へば。

いか程喰ひ込まんも知れず。とあつて匿

ふまいといはば。かの辨慶滅相考。七つ

道具の錯で家尻切らんも知れ申さず。

どかか盗まれ申さんより。一山の出し前

にて。茶粥を食はせ養ふが。無勘定なら

んとサハリッ申すにぞ。無法眼をかしく

思ひながら。詞ムウそれも肝要。無扱兩

人はといはせもあへずされば。此

事に於て勘定も何にも入らず。人を救ふ

が沙門の役。科なき義經隠匿ふとて鎌倉

より討手來らば。無忍辱の袈裟引代へ。

降魔の鐙に身を固め。逆寄に押寄せ討取

り。直ぐに鎌倉へ追上り御身に覚えなき

條々。申聞いて讒者輩一々に切並べ。そ

れも叶はぬものならば理非辨へぬ頼朝を

討取つて。判官殿の天下とせん。我々が

所存此通り。法眼殿の御了簡ッ承らん

と申しける。詞イヤ、まだ申されぬ。

法橋殿の御意ある近頃の客僧。横川の
禪師覺範此場へ参り合さず。此了簡も聞
かねば言はれず。地などや遅きぞ待久し
とハッア云ふ間程なく山道を。靜々歩み
來る法師は名にし合ひたる横川の覺範。
衣のつゆ高く取り三尺五寸の太刀佩き反
し。末座に坐れど丈高く僧柄。フシゆゝし
く見えにける。叫ヤア待兼し覺範殿。地近
うくゝと招き寄せ。法眼すんど立上り。
叫コレく覺範。アレ見られよ。霞の中
に麗なる。二つの山は妹脊山。是合體の
歌名所。川を隔てて西は妹山。東は脊山。
山は二つに別れたり。妹は妹弟の義。
脊山は元より兄頼朝。義經兄弟の中。
吉野川引わかれし。姿は山に異らずされ
ば歌にも流れては。妹脊の山のフシ中に
落つる。地吉野の川の。よしや世の中と
詠みたれば。世を捨人の我々でも。頼頼む
に引かぬか但しは又。浪の白双で討取る

氣か。手短き返答聞かん。申されやつと
言ひければ。思案に及ばずすつと立ち
打點いて。藏王堂に掛け奉る。奉納の弓
と矢取つて弦轉し。河運殿御覽あれ手
短き我が返答。地山と山との目通りに立
つたる二本は勝負の目當。返答御覽と弦
打ちつがひ。かたむる迄なく發矢と放す。
白矢は脊山の印の木根深にゆつてフシ立
つたりけり。地法眼きつと見。頼朝に准
へたる脊の山に弓引かれしは。頼朝に敵
對うて義經の味方よな。ムウくゝとばか
り以前の状。ぐるくゝ巻いて懐中し。地
山科法橋梅本坊藥醫坊も其通り。地や皆
一同に義經の味方々々と呼ばはれば。地
ムウそれならば法眼が所存も是にて明か
さんと。地同じく弓矢手に取上げ引堅め
たはいづれを的。どちらにつくぞと見る
中に。かつきと放すは義經に名さす妹山
弟の山。叫ヤア扱は法眼頼朝方。義經に弓

變かるゝよな。いかにも。落人に與せん
より。世に連れて一山の。破滅にせぬが
仕置の役目。しかとさうや。イヤ覺範味
な所に念が入る。義經此山を頼みなげ引
つけて覆はれよ。金輪際此法眼。搜
出して討つて見せう。其時は敵味方。無
分別なる衆徒輩に談合せし隙惜しや。今
日の參會是迄々々。さらば。地くゝと言
捨に。駕を待たずして立歸る所存の。フシ
程ぞ訝しき。地跡に鬼佐渡口あんごり。
叫アリヤ何の事どう云ふ事。言合せたは
皆すまた。覺範はどう思ふぞと。地山科諸
共尋ねれば覺範ふつと吹出し。叫其淺い
了簡故。法眼が底意を知らぬ。今の詞で
とつくりと。義經をかかまひ居る底の底
迄皆智れた。法眼も我が所存。義經の味
方とは嘘と睨んで歸つた眼中。事延々計
らば。落しやらんも計られず。今宵
八つの手筈を定め。夜討に入つて討つて

取り。鎌倉殿の恩賞に預れ旁、覺範が夜討の懸引催促を。堀開けやくと大木の朽根にどつつかとフシ腰打かけ。我釋門のより／＼に。孫吳が兵書譜じたり。我が詞を過たず。荒法橋は下兜十騎餘り。燈籠が辻より一文字に。彼が館にひたひたと押寄せて。喚鐘三つ四つ耐聲せよ。

鬼佐渡は又如意輪寺の裏の手を眞直に。六地藏の橋を引き。敵逃ぐる時を待ちさん／＼に射て留めよ。此覺範は新坊谷の。坊に火をかけ。コハリ火を上げて聖天山より。ナメス無二無三にかけちらして勝利を得ん。今夜の勝つ事手裏にありフシ勇め／＼といひければ。藥醫坊頭を打掉り。それは味方の思ふ儘。敵強うして荒法橋が手勢を投退け。駈散らし幕直に討つて出で。勝手かてての宮を陣所として。門をひつしと打たばいかに。堀ホ、ウ理にも咎めたり。其時は八王寺金剛院王

の袖振る山。峰に上つて眞下りに引詰め。差詰め射るならば其處もたまらず逃失せん。其時はまだ喚かぬ櫻の木隠れ枝隠れ。木の間／＼の細道を。逃行く先は天皇橋。大將軍の多寶塔。時に取つての角構。追ひくる衆徒を待ちかけて射かくる矢先は扱あつかいかに。小ざかし、

荒法橋。何條射るとも落人が。持つたる矢種は數知れたり。歸かへいては寄せ。寄せては歸き。矢種盡くさせ討取るに何の間際入るべきぞ。恐れな音すな用意せよ。いそふれ方々其背。天武の軍有りし時。少女下つて舞奏つ。これ反附の始めなり。いざ勝軍の表を取つて。たう／＼とろ／＼踏みならず。左に七足。右七足。左右合して十四足。はた／＼はつしと踏治め。サア行け進めと逸散に。勇み足して立歸る。横川の禪師覺範が勇氣。稀なる倉方とおつしやるは。衆徒の心をこちか

消えぬ。山里。いかで。春をしらまし。ナホスハルフシ春は來ながら。春ならぬ。郎判官義經を御慰めの翠三味や。河連法眼が奥座敷。音じめもフシ世上忍び駒。翠柱に立つる鴉がねも。春を見捨てぬ志。フシ實に頼。もしきもてなしなり。今朝より他出の法眼心に。一物あり顔に。フシ

悠々と立歸れば。義妻の飛鳥は出向ひ。異ことない早いお歸り。今日の御評定一山のお仕置か。但しは又奥のお客。義經様の御事かはと尋ねれば。ム、ウ扱は吉野一山義經の事とも。ム、ウ扱は吉野一山残らずお味方と云ふ様な品にもや。成程成程。衆徒の中にも返坂の藥醫坊。山科の荒法橋。梅本の鬼佐渡等。別しては横川の覺範。一端立つて義經の味方といふは。我が心を捜し見ると知つたる故。此法眼は鎌倉方と言放つて歸つたり。ムウ鎌倉方とおつしやるは。衆徒の心をこちか

らも。搜して見る御了簡。イヤ／＼。法眼今日より心を改め。義經とは敵味方。

エ、イ。あのお前は義經様を、ヲ鎌倉殿へ討つて出す氣合點行かすは是見よと。

懐中の書翰投出せば手に取上げ。文習破らず読み終り。ムウ義經公此山に御忍びまします事。鎌倉へ知れたやうな文體。ヲ、いかにも汝が云ふ如く。天に口なし人を以て言はしむる。告知らせた者

なくて小男の茨左衛門。斯くいうて越すべきや。内通せられて知れたる上は通れなき判官殿。人に手柄させんより。我が

手にかけて討つ所存。ヤア夫は眞實か。おう。イヤ本々此方様は。義經を切る心かくどい／＼。ハアはつと。エエ吐胸も突詰めし夫が刀抜くより早く。自害と見ゆる女房が。持つたる双物引たくつ

り。調こりや何とする何で死ぬと。言言ふ顔きつと打守り。調エ、聞えぬぞや法眼

殿。なぜ隔てては下さるぞ。恩賞の御下し。千通萬通來たとても。一旦の契約變ずる。此方の氣質ぢやない。鎌倉殿の忠臣。茨左衛門が妹の飛鳥。義經公の御隠家。

兄の方へ知らせたかと此狀が來た故に疑うての心ちやの。覺えない言譯をまだ／＼として居られぬ。疑ふよりは一思に殺して下され。法眼殿と恨み。涙ぞ

實なる。法眼始終を聞きすまし。以前の一通取るより早く。ずん／＼に引裂き

／＼。偽りに命は捨てまじ。女房を疑ふは未練には似たれども。義經公へ抜目なき我が忠節。衆徒等の胸中探りし序。

心引見ること暫狀。引裂き捨つれば安堵して。自害を止められ女房と。解くる詞は春の雪恨も消えて。ッなかりけり。調ヤ

ア法眼歸られしな。地面談と義經公。奥の間より。ッ出でさせ給ひ。鞍馬山の

誼を忘れず。一々の御厚志祝着詞に述べ

がたし。調豫て申し談ぜし通り。今日の衆徒の評定委細あれに承知せりと。御談にはつと頭を下げ。調師の坊の命といひ只ならぬ御方。疎略なき心底御存じ

の上は身に餘る悦び此上や候べき。武藏坊は奥州秀衡方へ遣はされ。御家臣として

少ければ龜井駿河などが如く。思召し下されよと申す詞のうち使罷出で。調

佐藤四郎兵衛忠信殿。君の御行方を尋ね御出なり。通し申さんと同ふにぞ。扱

は無事にて有りつるな。此方へ通せ對面せんと。調仰傳ふる次の間へ。法眼夫

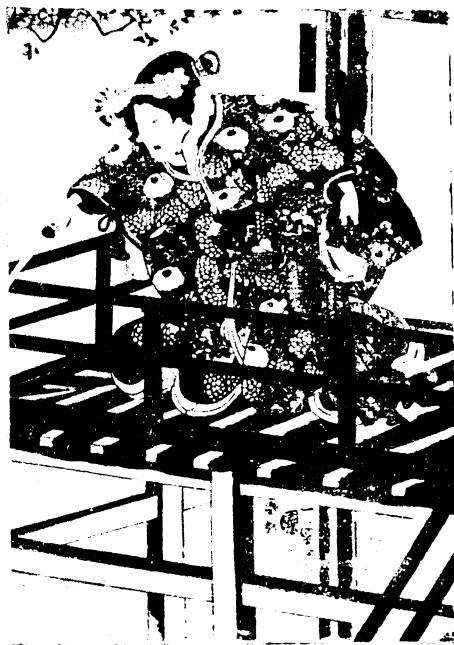
婦は立つて行く。ハケン案内に連れて入来る。四郎兵衛忠信。御座の間此方に

出で。絶えて久しき主君の顔。見るも無念の。ッあら涙差しうつ。伏いて詞なし。

調大將御機嫌斜めならず。調汝に別れてこゝかし。鎌倉殿の御詮議強く。身の置

所なかりしに。東光坊の弟子。河運法眼

けり。詞ヲ、女心に歎くは尤も。別れし時言ひ聞かせし如く。人の情に預かる義經ノ輪廻きたなき舉動ならねば。つれなくはもてなしたり。忠信を同道とや。何處に有ると尋ね給へば。詞たつた今次の間迄連立つて参りしが。爰へはまだかと思廻しく、それく。ても早う爰へ来てぢや。一所にお目にかゝるものを。ちつとの間に先へ抜けがけ。まだ軍場かと思つてか。まんがちな人ではあると恨口なる詞に不審。一倍晴れぬ四郎忠信。詞我が君も其如く覺えなき御尋ね。拙者めは今の先き。出羽の國から戻りがけ。去年お暇申してからお目にかゝるは只今初めて。悪エゝあの人の子やらくと思戲な事ばかり。悪戲でなし大眞實。爰アレまだ眞顔で欺すのかと。フシ何氣もなまめく詞の中。立戻る龜井の六郎。詞静様同道の忠信引立て来らんと存



せし所。次の間にも在合さず。玄關長屋所方々尋ねても知れず候と。申すに心迷はせ給ひ。詞コレ靜。爰に居るは其方を預けたる忠信ならず。只今國より歸りしと物語りする中。忠信靜を同道との案内。二人有る中にも見えざるは不審者。面體似たる賢者ならずや。靜心はつかざるかと。仰の中に忠信を。つれくんと打眺め。詞ハアどうやらさうおつしやれば。小袖も形も違つてある。ア、お待ち

遊ばせや。ハツアそれが。フ、さうぢや。
 思ひ當る事がある。君が形見と別
 れし時賜はりし初音の鼓。御覽遊ばせ此
 様に。肌身も放さず手にふれて。忠信の
 介抱受け。八幡山崎小倉の里所々に身を
 忍び居たりしに。折々の留守の中。君戀
 しさの此鼓。打つて慰む度々。忠信歸
 らぬ事もなく其音を感に堪ゆる事。ほん
 に酒の過ぎた人同然。打止めばきよろり
 つと何氣ない顔付は。よく〜鼓が好
 きさうなと初手は思ひ二度三度。四度目
 にはテモ變つた事。又五度めは不思議立
 ち。六度めには怖氣立ち。それよりは打
 たざりしが。君は爰にと聞付けて。心せく
 道忠信にはぐれた時。鼓の事思ひ出し。
 打てば不思議や目の前に。來るともなく
 見えたるは。女心の迷目かと思つて連立
 ち。フ、來りしに。又此仕儀はどうぞい
 のと申上ぐれば義經公。ムムウ鼓を打て

ば歸り來るとは。それぞよき詮議の近道。
 靜其方に言ひつけるその鼓を以て同道し
 た忠信を詮議せよ。怪しい事あらば此
 分でと投出し。我が手で討たれぬ鼓の妙
 音。それを肴に一献酌まん。早々鼓打て

〜といひ捨て奥に入り給へば。龜井駿
 河も忠信に引添ひオクへてこそ入りにけ
 れ。靜は君の仰を受け。手に取上げて
 引結ぶ辛氣眞紅をないます。長調べ結
 んで胴かけて手の中しめて肩に上げ。手



品もゆらに打鳴らす。聲清々^{せいせい}と澄み渡り。心耳^{こころみみ}を澄ます妙音は。ホッシ世に類なき初音の鼓。江戸ギンかの。洛陽に聞えたる。

會稽城門の越の鼓。かくやと思ふ春風に。ナホス誘は來る佐藤忠信。靜が前に兩手をつき。音に聞きとれし其風情。すはやと見れど打止まず。猶も様子を。正調の音色。閉入り聞き居る餘念の體。怪しき者とは見て取る靜。折よしと鼓を止め。

遅かつた忠信殿。我が君様のお待兼ね。

地 サア〜奥へと何気なき。詞にはつとは言ひながら。座を立ちおくれ差俯向く。

油断を見すまし切付くるを。ひらりと飛びのき飛びしさり。詞コハ何となさるゝぞと。地 咎められて氣轉の笑ひ。詞ホ、ホ、ヲ、あの人の氣疎い顔。久し振りの靜が舞。見ようと御意遊ばす故。地 八島の軍物語を。舞の稽古と鼓を早め。地 かくて源平入亂れ。船は陸路へ陸は磯へ。漕

寄せ打出で打鳴す。ナホス地鼓に又も閉入りて餘念他愛もなき所を。忠信やらぬと又切掛くる。太刀筋かはしてかいくゝるを付入る柄元しつかと取り。何科あつて欺し打ちに。切らるゝ覺え音つてなし

と。地 刀たぐつて投捨つれば。賢忠信のサア白狀。仰を請けた靜が詮議。いはすば斯うしていはすると鼓押取りはた〜。女のかよわき腕先に打立てられてハアはつと。誤り入つたる忠信に鼓打付けサア白狀。サア〜さあと詰寄せられ。一句一答詞なくフシたゞ平。伏して居たりしが。地 潮々に頭を擡げ。初音の鼓手に取上げ。ヌエも恭しく。押戴き〜。靜の前に直し置き。ハハシしづ〜立つて。廣庭へ下りる姿もしを〜と。みすぼらしげに。フシ手をつかへ。地 今

日が日まで隠しおぼせ人に知られぬ身の上なれども。今日國より歸つたる誠の忠

信に御不審かゝり。雑儀となる故。據なく。身の上を申上ぐる始りは。それなる初音の鼓。地 桓武天皇の御宇。内裏に雨乞ありし時。此大和國に。千年劫經る牝狐。牡狐。二足の狐を狩出し。其狐の生皮を以て拵へたる其鼓。雨の神をいさめ

の神。日に向うて是を打てば。鼓は元來波の音。狐は陰の獸故。水を起して降る雨に。民百姓は悅の聲を初めて上げしより。初音の鼓と號け給ふ。其鼓は私が親。私めは其鼓の子でござりますと。地 語るにぞつと怖氣立ち。騒ぐ心を押鎮め。地 ム、そなたの親は此鼓。鼓の子ぢやといやるからは。扱は其方は狐ぢやの。ハツア成程。雨の祈りに二親の狐を取られ。殺された其時は。親子の差別も悲しい事

も。辨へなきまだ子狐。藻を被く程年も長け。鳥居の数も重なれど。一日親をも養はず。産の恩を送らねば。豚狼にも

劣りし故。六萬四千の狐の下座に着き、
只野狐と輕蔑（けいべつ）まれ。官上（くわんじやう）の願も叶はず。
親に不幸な子があれば、畜生よ野良狐と。
人間ではおつしやれども。鳩（とび）の子は親
鳥より枝を下つて禮義を述べ、鳥の親の
養ひを。首（は）み返すも皆孝行。鳥でさへ其通
り。況して人の詞に通じ。人の情も知る狐。
何ば愚痴無智の畜生でも。孝行と云ふ
事を。知らいで何と致しませう。とは云
ふ物の親はなし。まだも頼みは其鼓。千年
劫ふる威徳には。皮に魂とどまつて性根
入れたは則ち親。付添うて守護するは。
まだ此上の孝行と。思へども淺ましや
禁中に留置（あづ）き給へば。八百萬神宿直（しんじやくぢく）の御
番。恐れ有れば寄付かれず。頼も綱も切
れ果てしは。前世（ぜんぜ）に誰を罪せしぞ。人の
爲に仇する者。狐と生れ來るといふ。因
果の經文（きやうもん）恨めしく。日に三度。夜に三度。
五臟（ござう）を絞る血の涙。文（ぶん）火焰（くわん）と見ゆる狐

火は胸を。焦するフシ炎ぞや。ナホス詞か
ほど業（ごう）因（いん）深き身も。天道（てんたう）様の御恵みで。思
不儀にも初音の鼓。義經公の御手に入
り。内裏を出づれば恐もなし。ハツア嬉
しや悦ばしやと。其日より付添ふは義經
公のお蔭。稻荷（いなぎ）の森にて忠信が。在合
はさばとの御悔み。せめて御恩を送らん
と。其忠信に成り代り。靜様の御難儀を。
救ひました御褒美とあつて。勿體なや畜
生に。清和天皇の後胤。源九郎義經とい
ふ。御姓名を賜りしは。そら恐ろしき身
の冥加。是といふも我が親に孝行が盡
したい。親大事（おやだいじ）といふ思ひ込んだ心が届
き。大將の御名を下されしは人間の果を
受けたる同然。いよく親が猶大切。片
時も離れず付添ふ鼓。靜様は又我が君を。
戀慕（こぼ）ふ調の音。變らぬ音色と聞ゆれども。
此耳（こゝろ）へは二親が物いふ聲と聞ゆる故。
呼び返されて幾度か。戻つた事もござり

ました。只今の鼓の音は。私故に忠信殿
君の御不審蒙つて。暫くも忠臣を。苦し
ますは汝が科。早々歸れと父母が。教の
詞に力なく。元の古栖（ふるま）へ歸ります。今
迄は大將の御目を掬めし段。お情には靜
様。お詫びなされて下さりませと。縁
の下より延上り。我が親鼓に打向ひ。か
はす詞のしり聲も涙。ながらの暇乞人
間よりは。フシ睦（むつ）じく。親父様。母様。
お詞を背きませず。私はもうお暇申しま
する。とはいひながら。御名殘惜しかる
まいか。二親に別れた折は何にも知らず。
一日々々經つにつけ。暫くもお傍（そば）に居た
い。産（う）の恩が送りたいと。思ひくらし。
泣き明し。焦れた月日は四百年。雨乞故
に殺されしと。思へば照る日が恨めしく。
地（ち）すハリ。曇らぬ雨は我が涙。願ひ叶ふが
嬉しさに。年月馴れし遊狐。中に儲けし
我が子狐。不便さ餘つて幾度か。引かる

る心を胸窓に、荒野に捨て、出でながら。飢ゑはせぬか。凍えはせぬか。もし獵人に取りられはせぬか。我が親を慕ふ程。我が子も丁度此様に我を慕はうかと。案じ過しがせらるゝは。無切つても切れぬナハリ輪廻のきづな愛着の鎖に繋ぎ留められて。肉も骨身も碎くる程。悲しい妻子をふり捨て、去年の春から付添うて。丸一年経つや経たず。去ねとあると何とまゐ。あつと申して去なれましょかいの。お詞背かば不孝となり。盡した心も水の泡せつなさが除つて歸る。この身は何たる業。まだせめてもの思ひ出に。大將の賜つたる。源九郎を我が名にして。末世未代呼ばるゝとも。この悲しさは何とせん。心を推量し給へと泣いっ口説いっ身もだえし。どうど伏して泣き叫ぶは。大和の國の源九郎狐とッしいひ傳。へしも哀れなり。ハルシ靜はさす

が。女子氣の。彼が誠に目もうるみ一間の方に打向ひ。我が君それにましますかと申すうちより障子を聞き。ヲ、委しく聞届けし。扱は人にてなかりしな。今迄は義経も。狐とは知らざりし。不便の心とありければ。頭をうなだれ禮をなし。ナハリ御大將を伏拜み。座を立ち立ちながら。鼓の方をなつかしげにオタリ見返り。行くとなく。消ゆるともなき春霞人目に見えざれば。大將哀れと思召しアレ呼び返せ鼓打て。音に連れ又も歸りこん。フシ鼓々とありけるにぞ。靜は又も取上げて打てば不思議や音は出でず。是はくくと取直し。打てももくこは如何に。上とも平とも音せぬは。



ハア扱は魂残す此鼓。親子の別れを悲しんで音を止めたよな。人ならぬ身もそれ程に。子故に物を思ふかと。打萎るれば義経公。我とても生類の。恩愛の節義身に迫る。一日の孝もなき父義朝を長田に討たれ。日かけ鞍馬に成長りせめては兄の頼朝にと。身を西海の浮き沈み忠勤仇なる御憎しみ。親とも思ふ兄親に見捨てられし義経が。名を譲つたる源

九郎は。前世マゼの業ゴト我も業。そも何時の世
 の宿しよ酬じゆにて。かゝる業因なりけるぞと身
 につまさるゝ御涙に。靜はわつと泣出せ
 ば。目にこそ見えぬ庭の面我が身の上
 と大將の。御身の上を一口には勿體涙に
 源九郎。保ち兼ねたる大聲にわつと叫べ
 ば我と我が。妾を包む春體晴れて形を現
 はせり。義經御座を立ち給ひ。手づか
 ら鼓を取上げて。ヤイ源九郎。調靜を預
 り長々の介抱詞には逃べがたし。禁裏よ
 り賜り大切の物なれども。是を汝に得
 さすると差出し給へば。詞ことばに其鼓を下
 されんとや。ハア~~~~。有難や忝
 や。焦れ慕うた親鼓。御辭退申さず頂戴
 せん。重々深き御恩のお禮今より君の影かげ
 身に添ひ。御身の危き其時は一方を防ぎ
 奉らん。回返すぐも嬉しやな。舞臺ヲ、
 それよそれ。身の上を取粉れ。申す事宜
 つたり。一山の悪僧ばら。今夜此館を夜

討にせんと企てたり。押
 寄せさする迄もなし。我
 が天變の通力にて。衆徒
 を残らず誑あざむつて。此館へ
 引入れ。合あつり眞向立
 割車切。又一時にかゝつ
 し時。御手かくなは十文
 字。合あ或は右袈裟左袈裟。
 上を拂へば沈んで受け。
 裾を拂はゞひらりと飛
 び。合あ輕捷秘術は得たり
 や得たり。御手に入れて
 亡すべし。必ずぬからせ
 給ふなど。舞臺鼓を取つ
 て體をなし。飛ぶが如く
 に行末の跡をくらし失
 せにける。始終の様子
 詳かに。聞いて驚く四郎
 兵衛。龜井駿河諸共御



りし其時は富士の白雪吉野の春。見まくりほしさと慕へども大原の里におはしませす。母上戀しと慕ふ身は。文の花も吉野も何かせん。ナホスあちきなの上を思ひやれとばかりにてスエテ伏し轉びてぞ。泣き給ふ。フシ御いたはしさ勿體なさ。エ、しなしたりく。詞ノリ知盛も教経もあつばれ巧みし計略智謀。義經に見さがされしは。地よつく武運に盡きたるな。ヘツエ是非もなや口惜しやとの無念の奥齒に血をそゝぎ握り詰めたる掌裏に。爪も通らん其氣色。數百斤の験の重り。フシ休へ。兼ねて居たりしが。地萎れし眼くわつと見ひらき。詞ハア我ながら誤つたり。八鳥の戦。義經を組みとめんとせし所。船八艘を飛越え。味方の船へ引いたるは。計略の底を探らん爲。卑怯ではなかりしか。今又奥へ逃込みしも。我が計略を知つたる故。龍顏に逢はせ奉るは。

武士の情であつたよなア。ウム今は助くる。勝負は重ねていで歸らん。それ迄は教経が隠家へ還幸あれ。地再び廣き世となして御母君にも逢はせません。いさや御幸の御供とかき抱き奉る。馬手は長柄の大長刀。浮世を牛の車とも。フシ知しめされと奏しつゝ。地立出でんとする所に曳ど切る聲三振の太刀音。すはやと長刀引そばめ見返る間もなくかけ出づる。龜井駿河河速法眼。面々血刀首引つかへ。詞卑怯に候能登殿。一味の衆徒等一々に此如く討取つたり。天皇を囑にして後穢き逃げ足。門打つたれば遁れなし。サア勝負あるか降参あるか。二つに一つの返答と。地詞を揃へていはせも果てずぐつと睨付け。詞頃のあがく僅降参とは。汝等が性根に較べてぬかしたりな。汝等が首一々掲げて仕なん事。何の手間際入るべきや。帝を我に渡したる義經が寸志を

思ひ助け置くを。有難いとはぬかさいで。逃ぐるなどは案外千萬。供奉の穢れ思はずば睨殺してくれんす奴輩。飛びしさつて三拜せよ。ヤア人もなげなる廣言。組留めて鼻あかさんと。地三人五の手へぐの手へに追取り巻き砂踏みちらして詰寄れば。コハリ上に教経牽駄天立蹴下す眼角立つて。睨合ひたる其中に。ナホス帝は怖さ玉の緒もフシ消ゆるばかりの御風情。詞ヤア待て汝等鹿忽すなと聲をかけて義經公。地鳥帽子狩衣引繕ひフシ物の具ならぬ御出立。詞行幸の道を支へ。君臣の禮を亂る其憚り少からず。鎮まれ方々いざ義經も。天皇を御見送り奉らん。用意の裝束斯の如し。教経一人歸せしとて。天に入る徳もなく。地に入る術もあらばこそ。何條遁れなき命。汝等が手につかず。此所に在合せぬ。忠信に討たすれば。見稱信が敵を討ち。修羅の妄執散する道理。教経

は世狭き身。義經も世を憚る身。地五に城も頼もなき戰場吉野の花檜に。勝負々々を決すべし。天皇入水と披露して内裏表濟んだれば。縦へ勝つとも負くとも。君に過致されな。ホ神妙の詞満足せり。些細の事にかゝはらぬ教經。義經ばかりを狙ひはせじ。天下に崇とる頼朝が素頭取つて。君が代に頼さん。其時は義經には莊園を申下して得ますべし。ヤア言くとし教經。義經を狙はゞ其儘。兄頼朝に敵對ふとは。聞捨てならずと御大將御佩刀に手をかけて。すはやと見ゆる腹心に。分入り宥むる源九郎狐名をかりの恩忠信が。本意なき思ひ鎮むるとは目にこそ見えね君の守護。聞さらばよ義經さるにても。帝のお命助けたる情の禮には教經とも。能登守とも名乗りては敵たはぬは我が返報。再會の名は横川の覺範。吉野山にて忠信に出つてわして勝負せ

ん。五の命は其時々々。悪調行幸なるぞ難人輩。路次の登固と呼ははつて。又抱上ぐる。ンシ安德帝。君々たれど君たらず。臣々たれど臣たれぬ横川の覺範。供奉の役敵々ながら義經が。警蹕の聲高々と威儀あり。意趣あり情あり。ヨハリ河逕法眼先驅の役。駿河の仕丁龜井の六位。官人ならぬ堆忍の二字を守つて控ゆれど。布衣なさ餘つて鯉口のくつろぐ光り銀魚袋。ナホス供奉は門前人目あり。赦させ給へと敬つて頭は下げても顔と顔。睨んで別るゝ兩大將。源九郎義經の義と。いふ字を訓と音。源九郎義經附添ひし。大和言葉の物語其名は。高く。聞えける

第五

の尉源の義經なり。兄頼朝が家來の汝等。現在我に敵するは。主に又向ふ無道人。天狗に習ひし妙術にて。一々に蹴殺して。谷の水屑としてくれん。ンシ觀念せよと呼ばはつたり。右往左往に取巻いたる。讒者一味の鎌倉勢々に。ア主従とは事をかし。主か主であらざるか。討取つて見せつけん。地かゝれや蒐れと一面に。打つてかゝるを事ともせず。右へ雑立て左へ拂ひ。切立てく切立つれば。一先づ引けと鎌倉勢。逃ぐるをやらじと。岨道を足に任せて。フシ追つかくる。江戸平家の大將能登守。忠信に出合はんと。約束違へぬ衆徒頭巾。形も横川の覺範を。人はそれともしら雪を。踏みならしてゾフシ歩みくる。ナホス堀山端岩角けしとます。追散らして立歸る佐藤忠信。豫て期したる約束の。敵は向うに待ちかけた。鎌倉勢の返さぬ内に。名乗合はして

勝負せんと。立寄る相手をにつこりと。笑うて待つたる。ヨリ勇將義士。五に招かれ招き合ひ。ヨリ去年三月八島の磯にて。大將軍の御馬の先に立塞がり。忠心に矢を受けとめたる。佐藤三郎兵衛繼信が弟。四郎兵衛忠信。兄の敵平家の大將能登守教經。恨の双參らすとぞ名乗りける。ヲ、しをらしや忠信。兄の敵と名のるからは。討たれてやるが本意なれども。安德帝を守り奉り再び天下を覆す教經。不便ながら返討。冥途で兄に言譯せよ。横川の禪師覺範が。引導してくれんすと。長刀杖につき反し。ツシかんらからとぞ打笑ふ。戰終つて後。眞向かざしに忠信が。討つてかゝる太刀を。かはしてはたゞはつしとあふ。合ひつばづして忠信が。切身に入つたる太刀先を。もどいて拂ふ長刀の難手。合打手に事ともせず。ヨリ右にかゝれば左へ踊り。

合地 左に乗せんと取直す白刃。鏑。ていから。唐紅の緋絨や。五に勝色分かさりしに。覺範頻に打ちかくれば。ひらりと飛んで大木の。櫻の梢に身をたもつ。追取直して櫻木の。斜にすつかと切りかけて。足に任せて踏放せば木は。めりくくと中絶し。地に向うの岸に忠信が。木に送られて渡り越す。合跡は架橋丸木橋。これ究竟と踏みしめく。渡る不敵の勇猛將。過つて踏止めし。足場すべつて谷底へ。落つれど落ちず諸足に。枝を纏うて眞逆様。只一刀と打ちかくる。四郎兵衛が太刀先を拂ふ長刀水車。草摺の音鏑の音。ちりんはたぐ。合しつてうゝ實に。目覺しき働なり。地追散されし鎌倉勢。忠信遣らぬと取つて返し。又ばらぐと討ちかゝるを。南無三寶邪魔と渡りあひ。打合ふ隙に覺範が。櫻にかけし諸足を。切らんとかゝれ

は木を放れ。落つるを見捨て鎌倉勢ハヤに斃殺にと追うて行く。地谷には教經手練の早速。ひるます塵に長刀を。突立て。駈上れど。雪に凍てたる土砕け。氷柱に岩石滑らかに。上れば滑りすべつても。合組の梅が杖足代に。半上りし岩の上。ツシ鎌倉勢を追散し。ヨリ弓手の方へかけ來る佐藤忠信。覺範爰へと招かれて。上るに隙のあら返し。忠信それへと言捨て。さしもに高き頂上よりふはと飛んだは飛鳥より。遙に輕き其勢。我もと覺範つゞいて飛び。あはや高紐總角が枝にかゝつてぶらぐ。合稚な遊びに。櫻の。戯など見ることく。地身動きならぬを忠信が。切付くるを身を背け。くるりと廻れば枝すつかり。切放されは天命に。盡きぬ所と大手をひろげ。かゝる相手も太刀投捨て。五にえいやと引組んだり。合ヨリこりやくと忠信が。

毘沙門腰にて押しかくれば。ひらりと外してどつこいと。踏みとまつたる摩利支天。雪踏みちらして。フン争ひしが。何とかしけん忠信が。組んだる小手先振ぎ放され。又組寄らんとする所を。ぐつと掴みかつばと投げ。膝に引敷く折こそあれ。不思議や又も駈ける忠信。のつかかつたる覺範が。具足の隙間をてうど切る。切られて怯まず振返り。見るよりびつくり。コリヤ忠信こいつ何ぢやと引敷いたる。高紐掴んで引上ぐれば。忠信ならぬ義經の。御着長の鎧ばかり。是はと。呆るゝ處を窺ひ切付けく切付くる。深手にさしもの能登守。寄つて首取れと。いふより早く義經公駈着け給ひ。いかに教經。安徳帝は大原の里にて御出家遂げ。御母君の御弟子とせん。あつばれ名高き教經なれども。通力自在の源九郎狐。忠信に力を添へたる

鎧。軍術にも裏かゝすと。仰もあへぬ出合頭河越太郎重頼。左大将朝方を高小手に縛め。久しう候義經公。賜る鼓に事を寄せ。頼朝討討の院宜と號けしは。朝方が業と事現れ。義經に計はせよと命を請けて参つたりと。聞くより教經座を立上り。ホウ平家追討の院宜も。朝方が所爲と聞く。彼奴を殺すが一門への言譯と。いふより早く首打落し。

サアく義經教經が首取れといはせも果てず。ヤア能登守教經は。八島の沖にて入水せり。横川の覺範が首は忠信にと。仰の中に振り上げて。兄の敵を討ち納め打治つたる君が代に。奥州へ行く大原へ行く。平家の一類討亡し。四海太平民安全。五穀豊饒の時を得て。穗に穂榮ゆる秋津國繁昌ならびなかりけり

延享四丁卯年

霜月十六日

竹田 出雲

作者 三好 松洛

並木 千柳